スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止場、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く揚げ　国際非合法党を建設せよ！

赤報

1978年1月25日発行
共産主義者同盟（RG）
第23号 200円　発行人　野村　忠

政治的煽動について

はじめに

政治的煽動ということについて、あらためて論じることを奇異に感じる人々がいるかも知れない。だがわれわれは、今日どの党派によっても、レーニン主義を継承した正しい政治的煽動がなされていないと考えている。というのも、どのような政治的煽動を行うかということは、その党派の綱領、戦術、組織に規定されており、革命的マルクス・レーニン主義の綱領戦術、組織が正しく継承されていないところでは正しい政治的煽動もまた実現のしようがないからである。

われわれは党建設の第二段階において、革命的マルクス・レーニン主義の綱領を復権し、一九六九年から七一年にかけて闘われた武装闘争の経験にもとづく政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊の組織路線を、マルクス・レーニン主義の組織に対する中央集権主義の思想を継承することによって、国際非合法党の組織的基準としてうち固めてきた。そのことによってわれわれは、この国際非合法党の任務としての、全面的政治暴露を組織することにもとづいた政治的煽動による労働者階級に対する政治的教育を実現する条件を獲得してきたのである。

一九七六年一〇月一三日に開始された政治警察による一斉検挙攻撃は、われわれの当初の計画の部分的変更をせまったが、この攻撃に対する反撃を組織する中で、われわれは第二段階において準備してきた基本的な計画の正しさを確認し、いち早く体制をたてなおすことができた。われわれはまだ小さな党であるが、政治的煽動という共産主義者の基本的任務を『赤報』の刊行によってはたしてゆくであろう。

一九七八年、われわれは本年にまず『赤報』の隔月刊を勝ちとり、政治的煽動の活動を強めると共に、『赤報』を実質的な全国的政治新聞へと鍛えあげてゆくための土台を強固に形成してゆくことを宣言する。以下の提起はこの宣言の裏づけをなすものに他ならない。

(A) 政治的煽動についてのレーニンの思想

(一) 社会民主主義者の意識性について

『何をなすべきか』で政治的煽動について主として述べられているのは、第二章、組合主義的政治と社会民主主義的政治においてである。だがこの章の内容を正しく把握するためにはそれ以前の二つの章、とりわけ第二章、大衆の自然発生性と社会民主主義者の意識性、についての理解が前提とされる。というのは、レーニンはこの本で「われわれの政治的煽動の性格と主要な内容の問題、われわれの組織上の諸任務の問題、全国的な戦闘組織を同時にいろいろな側面から建設する計画の問題」(レーニン全集五巻、三六五頁)という三つの問題をテーマとしているのであるが、経済主義の影響が予想した以上に強かったために、この三つの問題について各々第三、四、五章で述べるに当り、その前に「もっと一般的な二つの問題から始めなければならなかった」(同書、三六七頁)からであり、またそうしたが故に、三つの問題を論じるに当って、当初予定されていた叙述の方法を変えなければならなかったからである。

だから、われわれも、第三章で述べられている政治的煽動について論じるに当り、それ以前の章について必要最小限の事柄に関してみておく事にする。

第一章でレーニンは当時の国際社会民主主義運動内部に形成されてきたベルンシュタイン主義という日和見主義的傾向に歩調をあわせていたロシアの合法マルクス主義の役割について次のように述べている。

「合法マルクス主義者の大多数があげてそれへ転向したベルンシュタイン主義と『批判的』傾向とは、マルクス主義を卑俗化し、社会的諸矛盾が緩和しつつあるという理論を説教し、社会革命やプロレタリアートの独裁やの思想は不条理な考えであると宣言し、この可能性をうばいさり、社会主義的意識を堕落させた。これはブルジョア民主主義が社会主義の自主権を、したがってまたその生存権を否認したのに、まったく等しかった。」(同書、三八一頁)

このように合法マルクス主義の役割を、社会主義的意識を堕落させるものであり、実践的には始まりかけた労働運動を自由主義者(ブルジョアジー)の後尾に変えてしまうものであることを明らかにしたレーニンは、「教条主義、空論主義」「思想を強圧的に束縛する不可避なむくいとしての党の硬化」なるものに対して「批判の自由」と呼んでいた合法マルクス主義との闘争において、理論の意義について強調した。レーニンは一般的に「革命的理論なしに革命運動もありえない」ことを強調するだけでなく、この理論の意義について、ロシアの社会民主主義者の直面していた三つの事情とのかかわりにおいても強調している。

三つの事情とは、第一に社会民主党がようやく形づくられつつあり、自分自身の個性をつくりあげつつあるところで運動を正しい道からそらすおそれのある他の革命的思想傾向との対決を語るにはまだほど遠いこと、第二に、社会民主主義運動は国際的であり、他の国々の経験を摂取してはじめて成功することができるが、そのためには、国際的な経験を批判的に取り扱い、それを自主的に検討することが必要であり、このためには理論的努力と政治的、革命的経験を必要とすること、第三にロシアの党の国民的任務が、全人民を専制のくびきから解放するというところにあり、先進的な理論に導かれる党だけが先進闘士の役割をはたすことが出来る、ということであった。

では、この革命的理論とはどのようなものであり、理論闘争の意義はどこにあるのだろうか。第二章でレーニンはこの問題に解答を与えている。

合法マルクス主義は、ロシアにおける自然発生的な労働運動の発展のなかで次第に成長し、その理論を形成してきた。その基本主張は「発展の客観的あるいは自然発生的要素の意義の過小視」といった批判の仕方に鮮明にあらわれている。レーニンはこの種の批判に対して自然発生的な労働運動の役割を明らかにし、「自然発生的要素」を重視せよ、という合法マルクス主義者の理論のブルジョア的性格を暴露している。

レーニンは主張する。「『自然発生的要素』とは本質上意識性の萌芽形態にほかならない」のであるとはいえ、しかし、歴史的にみれば、過去の労働者の自然発生的闘争は組織的ストライキ闘争へと発展し、階級闘争の芽ばえをあらわしていたが、それはそれ自体としては「組合主義的闘争であって、まだ社会民主主義的闘争ではなかった。それらは、労働者と雇い主との敵対のめざめを表示するものではあったが、しかし労働者は自分たちの利害が今日の政治的社会的体制全体と和解しえないように対立しているという意識、すなわち社会民主主義的意識をもっていなかったし、またもっているはずもなかった」(同書、三九五頁)のであった。

というのは、歴史的には「社会民主主義派の理論的学説は労働運動の自然発生的成長とはまったく独自に発生した」(同書、三九五頁)のであり、社会民主主義的意識は労働者の自然発生的闘争の外部からしかもたらしえないものだったからである。このような考察の後にレーニンは合法マルクス主義者の経済主義の主張に立ちかえり、

「いやしくも労働運動の自然発生性のまえに拝跪することは、いやしくも『意識的要素』の役割、社会民主主義派の役割を軽視することは、とりもなおさず――その軽視する人がそれを望んでいようといまいと、それにはまったくかかわりなく、――労働者にたいするブルジョア・イデオロギーの影響を強めることを意味する」(同書、四〇四頁)と述べている。

このように自然発生的な労働運動とは組合主義であり、純職業的闘争であるが、組合主義とは、まさしくブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化を意味するからである。だから、われわれの任務すなわち社会民主主義者の任務は自然発生性と闘争すること、ブルジョアジーの庇護のもとにはいろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から労働運動をそらして革命的社会民主主義の庇護のもとに引き入れることである」(同書、四〇六頁)

「労働者大衆自身が彼らの運動の進展それ自身のあいだに独自のイデオロギーをつくりだすということが考えられない」(同書、四〇六頁)以上、ブルジョア・イデオロギーか社会民主主義的イデオロギーかが労働者大衆のなかにあるのであって、中間のものはない。そしてブルジョア・イデオロギーが社会民主主義的イデオロギーより「その起源においてずっと古くいっそう全面的に仕上げられていて、はかり知れないほど多くの普及手段をもっている」(同書、四〇八頁)以上、自然発生的な労働運動は、しばしばブルジョア・イデオロギーに結びつくのであり、とくに社会民主主義者が労働運動の自然発生性と必死の闘争を行なわず、その運動の自然発生性の前に拝跪するならば、ブルジョア・イデオロギーが労働運動を支配するようになるのは明らかである。

このようにしてレーニンは自然発生的要素の過小視」といったことを主張した経済主義者は意識的要素を軽視し、労働運動をブルジョア・イデオロギーの支配の下にひきわたす役割をはたすことになることを明らかにし、そして自然発生性と闘争するということの重要性を強調したのであった。

レーニンは「大衆の自然発生的な高揚が大きければ大きいほど、運動がひろまればひろまるほど、社会民主主義派の理論活動においても、政治活動においても、組織活動においても、多くの意識性をもつ必要がくらべものにならないほどいっそう急速に増大する」(同書、四二一頁)と結論づけ、「自然発生性へのこの拝跪が、社会民主主義派の政治的任務の分野と組織活動とにどう現われていたか」(同書、四二二頁)を明らかにするために、第二、四、五章で述べられている二つの問題へと移っているのである。

(二) 全面的政治暴露を組織する任務について

レーニンは第三章で組合主義的政治と社会民主主義的政治とを対比し、社会民主主義者の政治的任務について論じている。レーニンはまずその主要な任務である政治的煽動についてとりあげている。その際まずすでにロシアの労働者の間で広範にひろまっている経済的暴露についての評価からはじめている。経済的暴露は「実質上まだ社会民主主義的な活動ではなく組合主義的な活動にすぎない」のであり、この暴露は「その当の職業の労働者と彼らの雇主との関係をとらえただけで、それによってなしとげられたのは、労働者の売り手が、この『商品』をより有利な条件で売ることと、また純商業的な取り引きを基盤として買手とたたかうことを学びとっただけであった。」(同書、四二五頁)とレーニンは述べている。

経済的暴露それ自体では、労働者を社会民主主義的意識で満たすことは出来ないのであり、それは組合主義的な活動であるにすぎない。のであるが、しかし経済的暴露を行い、組合的闘争を指導すること自体が組合主義的傾向をもつということではない。「こういう暴露は(革命家の組織がそれを一定のやり方で利用するときには)社会民主主義的活動の端初にも構成部分ともなることができるものであったが、しかしまた『純職業的な』闘争と非社会民主主義的な労働運動とに導くものともなりえた(そして自然発生性のまえに拝跪するときには、そうなるほかはなかった。)」(同書、四二五頁)とレーニンは主張している。

社会民主主義者には、したがって経済的暴露や組合的闘争の指導のみを自己の任務とすることは許されない。「社会民主主義派は労働力販売の有利な条件を獲得するための労働者階級の闘争を指導するだけでなく、また無産者が金持に身売りしなければならないような社会制度をなくすための彼らの闘争をも指導する」(同書四二六頁)のであり「現代社会のすべての階級にたいして、組織された政治強力としての国家にたいして労働者階級を代表」しなければならない以上、社会民主主義者は経済闘争にとどまることはできないし、経済的暴露の組織が彼らの主要な活動であるような状態をゆるすことはできないのであって「労働者階級の政治的教育に、その政治的意識を発達させることに積極的にとりかからなければならない」(同書四二六頁)のである。

このように経済的暴露とは、独自の労働者階級の政治的教育ということを社会民主主義者の主要な任務として提起したレーニンは、この労働者階級に対する政治的教育は政治的煽動によってなされねばならず、そしてその政治的煽動は、全面的な政治的暴露を組織する作業がなければ成功しないと主張している。

「では、この政治的教育はいったいどういうものでなければならないか。労働者階級は専制にたいして敵対的な関係にあるという思想を宣伝するだけにとどまることができるであろうか?もちろん、できない。労働者にたいする政治的抑圧を説明するだけではたりない(労働者に、彼らの利害が雇い主の利害と対立することを説明するだけではたりなかったのと同じように)。さらにこの抑圧の一つ一つの具体的な現われをとらえて煽動することが必要なのだ。ところで、この抑圧は種々さまざまな社会階級にのしかかっており、職業的といわず、一般市民的といわず、個人的といわず、家庭的といわず、宗教的といわず、学問的、等々といわず、種々さまざまな生活と活動の分野に現われているのだから専制の全面的な政治的暴露を組織する仕事をとりあげないかぎり、われわれは労働者の政治的意識を発達させるという自分の任務をはたしえないであろうということはあきらかではないだろうか?」(同)

レーニンは当時のロシアの経済主義者の、労働者の政治闘争は経済闘争が発達したものにすぎないとか、経済闘争が大衆を政治闘争にひきいれるためにもっとも広範に適用しうる手段であるとか、政治的煽動は経済的煽動のあとにしたがわねばならない、といった主張に反論を加えつつ、このような主張にもとずけば、労働者に対する政治的教育をなしとげることは出来ず、また全面的な政治的暴露を組織するという任務にも敵対してゆかざるをえないことを指摘している。経済主義者は自然発生的な労働運動が組合主義的意識しかもたらさず、ブルジョア・イデオロギーの影響の下に組み込まれざるをえないということを理解していないために、政治的煽動や全面的な政治暴露といった社会民主主義者の主要な任務を提起することができないのである。

さらに、レーニンは、経済主義者が、社会民主主義者の任務を「経済闘争そのものに政治性を与える」ことであると定式化している事に対して批判し「経済闘争そのものに政治性を与える」といった仕事は、労働者の自然発生的な組合運動自体が実現したことであり、それゆえこのような労働組合の政治的役割をもって社会民主主義者の任務と規定することは、社会民主主義的政治を組合主義的政治にひくめようとするものであると述べている。

このレーニンの政治的煽動についての思想を、われわれは今日、継承しなければならない。もちろん、レーニンの時代と今日とでは階級闘争の諸条件は変化している。今日では、労働運動は基幹産業部門においては労働組合運動として展開されており、社会党・共産党民社党等の政党の影響下にある。自然発生的な労働運動や、労働者の経済闘争及び政治闘争は、これらの党派によって種々の色あいの組合主義的政治の枠に入れられ、ブルジョア・イデオロギーの支配にゆだねられている。共産主義的活動の端緒となり、その構成部分ともなるような経済的暴露は、これらの諸政党によって放棄されているばかりか、むしろ敵対視され労働組合からしめ出そうとされている。

労働組合は全面的に発達したことによって、レーニンの時代に比

較すれば、ずっと反動的な性格を持っており、ブルジョアジーによる労働者支配のための一つのテコとして利用されている。しかしだからといって、労働者階級に対し、政治的教育をなしとげるという任務を放棄することは馬鹿げたことであろう。労働運動が社会党・共産党・民社党といった、議会主義的・組合主義的政党や、社会帝国主義政党、及び反共政党の支配下にあり、そのことによって労働者階級がブルジョア・イデオロギーに支配され、ブルジョアジーの政治に屈従していることが明らかであればあるほど、共産主義者の労働者階級に対する政治的教育、政治的煽動はそれだけ一層重要であり、強力に広範囲にわたってなしとげられねばならないのである。

そして、われわれの勢力がまだ小さいことを考慮すれば、政治的煽動とともに、政治的宣伝の役割もまた大きな意義をもっている。かってロシアの経済主義者は、宣伝を現制度に対する革命的解明と把え、煽動を大衆に具体的行動を呼びかけるという意義に理解して宣伝と煽動とを切り離し、革命的な政治的宣伝のもつ意味を低めると同時に煽動を「目に見える成果、を約束する」課題へのよびかけというように狭い意味で把えていた。レーニンはこれに対し、宣伝も具体的な行動を呼びかけるものであることに関しては煽動と異なるものではなく、ただ後者が、多くの聴衆に一つの思想を与えようとする試みであるのに対して、前者は多くの思想をそれを一ぺんにわがものとすることは少数の人にしか出来ないくらいに多くの思想を与えるところに相違があると述べている。今日、労働者大衆が社会党・共産党・民社党等の影響下に組織されているとき、これらの諸党派との党派闘争のために、政治的煽動と共に、政治的宣伝も一層精力的になされねばならない。

(三) 労働者階級に対する政治教育と一般民主主義的運動が必要としている事柄との結びつきについて

レーニンは全面的な政治的暴露を組織することにもとづいてなされる政治的煽動について、より立ち入った考察を加えている。まず政治的煽動と全面的な政治的暴露を組織することとの関連が定式化されている。「政治的煽動の必要な拡大がなされるための基本的条件の一つは、全面的な政治的暴露を組織することである。このような暴露による以外には、大衆の政治的意識と革命的積極性とを培養することはできない。だからこの種の活動は全国際社会民主主義派のもっとも重要な機能の一つをなすものである。」（同書、四三九頁）つまり、政治的煽動によって政治的暴露を行うためには、全面的な政治的暴露を組織することを重要な機能とした組織活動が必要なのである。では、全面的政治暴露を組織するということはどういうことか。レーニンは次のように述べている。

「もし労働者が、専横と抑圧、暴力と濫用行為のありとあらゆる事例――この事例がどの階級に関係するものであれ――に反応する習慣を、しかもほかのどの見地からでもなく、まさに社会民主主義的な見地から反応する習慣を得ていないなら、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。もし、労働者が、具体的な、しかも絶体焦眉の政治的事実や事件にもとづいて、他のそれぞれの社会階級の知的・精神的・政治的生活のいっさいの現われを観察することを学ばないなら、――また住民のすべての階級・層・集団の活動と生活のすべての側面の唯物論的分析と唯物論的評価を実地に応用することを学ばないなら、労働者大衆の意識は真に階級的意識ではありえない。なぜなら、労働者階級の自己認識は、現代社会のすべての階級の相互関係についての、完全に明瞭な理解――たんに理論的な理解だけでなく、さらに……理論的な理解というよりもむしろ政治生活の経験にもとづいてつくりだされた理解――と切り離せないように結びついているからである。」（同書、四四〇頁）

「社会民主主義的政治を自主的につくりあげる」ということは具体的にはこのようなことである。ところでレーニンは全面的政治暴露を組織するということが社会民主主義者の緊急な任務であるということをここまでではもっぱら労働者階級が政治的知識と政治的教育を必要としているということから出発して引きだしたのであった。だが、このような立て方であると「一般にあらゆる社会民主主義派の、とくに今日のロシアの社会民主主義派の一般民主主義的任務を無視することになるであろう。」（同書、四五〇頁）として、レーニンは次に、プロレタリアートがもっとも緊急に必要としている政治的煽動と政治的暴露による全面的な政治的教育と一般民主主義運動が必要としている事柄との結びつきについて明らかにしている。

「階級的・政治的意識は外部からしか、つまり経済闘争の外部から、労働者と雇い主との関係の圏外からしか、労働者にもたらすことは出来ない。この知識を汲みとってくることの出来る唯一の分野は、すべての階級および層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の分野である。だから、労働者に政治的知識をもたらすためにはなにをなすべきかという問いにたいして経済主義に傾いている実践家はもちろんのこと、大多数のばあいに実践家を満足させる回答――つまり『労働者のところに行け』という回答を与えるだけではだめなのだ。労働者に政治的知識をもたらすためには、社会民主主義者は、住民のすべての階級のなかにはいっていかなければならない。自分の軍隊の諸部隊をあらゆる方向に派遣しなければならない。」（同書、四五一頁）

つまり、先には労働者の政治的教育のためには、すべての階級の相互関係についての理解が必要であることが述べられていたが、ここではその理解をもたらすために社会民主主義者は「住民のすべての階級のなかにはいっていかなければならない」という実際的側面がとりあげられている。レーニンは「われわれは自分の宣伝や煽動を住民すべての階級に向けておこなうだけの人手をもっているだろうか？」と自問し、人手をつくり出すのは「運動にすでに参加したか、あるいは参加を希望しながらまた社会民主主義派に心をひかれながら、よぎなく無為に日々をくらしている人々」（同書、四五九頁）の「勢力の全部を働かせ、全員に適当な仕事を与える能力」を問題としている。そしてこのような人々に仕事を与えるとともに、また、全人民的暴露のための演壇になれるのは全国的政治新聞だけなのである。

ところで経済主義者達は、住民のすべての階級のなかにはいってゆくと労働者階級との緊急な結びつきがたち切られ、階級的見地から逸脱することになりはしないかと心配している。これに対しレーニンは次のようにこたえている。

「――その階級性はこういう全人民的暴露を組織するものが、われわれ社会民主主義者であるということ――煽動によって提起されるいっさいの問題が、故意のものか故意のものでないかを問わず、マルクス主義のすこしの歪曲をも大目に見ない一貫した社会民主主義的精神に立って解明されるということ――全人民の名による政府にたいする襲撃をも、プロレタリアートの政治的独自性をまもりながらおこなわれるプロレタリアートの革命的教育をも、労働者階級の経済闘争の指導をも、すなわちつぎつぎにプロレタリアートの新しい層を立ちあがらせてわれわれの陣営に引き入れる労働者階級とその搾取者とのあいだの自然発生的な衝突の利用をも、これらすべてと結びつけて渾然たる全一体とする党が、この全面的な政治的煽動をおこなうこと、こういうことに現われるのである！」（同書、四六二～三頁）

レーニンがこの著作を書いた時には、ロシアの社会民主主義者はツアー専制の打倒、民主主義革命を当面の目的としており、したがって一般民主主義的課題ということも、今日のわれわれが持っているそれとは質を異にしている。というのは、当時においては一般民主主義的課題の中心は農民（小ブルジョアジー）との同盟にあったからである。にもかかわらず、レーニンが労働者を政治的に教育するためには「現代社会のすべての階級の相互関係についての完全に明解な理解」が必要であると述べていることは今日でも全く正しく、また全面的な政治的暴露を組織するためには「住民のすべての階級のなかにはいっていかねばならない」ということもその通りである。街頭闘争ではなく生産点での活動が重要だとか、階級的労働運動を職場からつくりあげるとか、自主管理に向けて工場内に権力を作るとかいった主張は、共産主義者の任務をもっぱら「労働者のところへ行け」という回答を与えることによって、共産主義者の最も重要な任務について欠落させているのである。

もっとも、レーニンが「住民のすべての階級のなかにはいっていかねばならない」ということを提起したとき、レーニン自身も述べているように、労働者のなかで社会民主主義派の活動は一定の発展段階にあり、そして、その活動の統合が問われていた時期でもあった。この点からするならば、今日のわれわれにとっては、労働者のなかでの共産主義者の活動が十分であるとは決していえない。けれども自然発生性な労働運動に対してロシアの社会民主主義派が接近し、影響力を拡大していったのと比して、今日、労働者のなかで共産主義者の活動を作りあげてゆくということは、はるかに困難である。というのは、組織労働者にとっては、労働者に近づきやすい諸課題は既成政党や労働組合によってまがりなりにもとりあげられており、これらを共産主義者がその活動の端緒、あるいはその活動の一構成部分としてとりあげるためには、共産主義者の活動が、あらかじめ先行していなければならないからである。

だから、今日「労働者とところへ行け」という回答を与えることは二重の意味で誤っている。というのは、第一に、労働者のなかでの共産主義者の活動が、いまだ定形化されておらず、それ自体が既成政党や労働組合幹部に利用され包摂されてしまうような段階にあることを隠蔽していることであり、第二に、この労働者のなかでの共産主義者の活動の混迷からぬけだす道が「労働者のところへ行く」ことによって解決されるのではなく、共産主義者の任務、政治的煽動によって、全面的な政治暴露を組織する活動によって解決されることを理解していないことにおいて。

今日、労働者階級のなかで共産主義者が活動する余地は広がっている。だが、これまでの手工業的な活動によっては共産主義者はその活動を拡大し、強化することは出来ない。既成政党の堕落の轍は共産主義者にも開かれているのである。

(B) ブンド系諸派の政治的煽動に対する思想の批判

(一) 紅旗派批判

レーニンの全国的政治新聞の計画は、「すべての側面から組織の建設に着手できるように一定の組織計画をつくりあげる」というロシア社会民主党の再建計画の柱をなすものであった。従ってロシアの社会民主党の再建という事業においてはたす新聞の機能と役割とを明らかにした上で、社会民主主義者の任務が、自然発生性と必死の闘争をし、労働者階級に対する政治的教育を全面的な政治暴露を組織することにもとづいた政治的煽動によってなさねばならないことにあるということから、この計画は党組織の活動の基本的内容を全人民的な政治的煽動におくということに基礎がおかれていたのであった。そして、このような活動内容を新聞の発行によって形成してゆく組織はあらゆる事態にたいして用意をもった組織であり、この意味でそれは新たな型の組織であった。そしてこのような組織のみが、当面する革命における革命党の任務をも平時から準備してゆけるのであり、プロレタリアートの独裁を組織計画の射程に入れ、それを準備する組織なのであった。

われわれはこの計画を、サークルを統合するといったいわば新聞の組織者としての機能にのみ注目する傾向や、また、この計画がプロレタリアートの独裁を射程に入れていることのみを強調する傾向をともに克服してゆかなければならないのであるが、そのためには「党組織の活動の基本的内容を全人民的政治的煽動におく」というこの計画の政治的核心ともいうべき内容に対する正しい把握が必要であり、そしてこのことは全面的な政治暴露を手段とし、それを組織することにもとづいた政治的煽動が社会民主主義者の最も重要な任務の一つであるということを提起したレーニンの政治的煽動に対する思想を復権することが必要だったのである。

この作業がなしとげられた上にたって、今日のブンド系諸派の全国的政治新聞の位置づけがどのようなものであり、また新聞による政治的煽動がどのようになされているか、ということを検討するなかから、われわれに課せられている政治的煽動という任務がどういうものでなければならないかということを明らかにしてゆくことは有益であろう。というのは日本の革命的左翼のなかで、種々の偏向をもちながらもレーニン主義に最も忠実にその運動を展開してきたのは他ならぬブンド系諸派であり、これらの諸派の活動と経験の総括ぬきに、レーニン主義の復権を語ることは、空語を語ることに等しいからである。

今日ブンド系諸派の諸分派の分裂はゆきつくところまで進んでおり、ここから自然発生的に、ブンドの再建統一が叫ばれている。そして一九六九年から七〇年初頭にかけて形成されていた分派の区分があいまいなものとなり、新たに発生している分派再編の諸傾向は古い区分の枠をはなれて存在している。このような事態は一九六九年から七〇年にかけて闘われた第二次ブンドの党内闘争及び分派闘争が徹底して闘われることがなかったことの帰結であるとわれわれは考えている。したがって、かっての分裂によって形成された古い分派の区分の崩壊と新たな区分の形成ということ自体も、党内闘争党派闘争によって形成された確固とした基準にもとづいたものではなく、政治的野合を本質とした各分派の連合という性格をもたざるをえないのである。とはいえ、各派を野合にかり立てている客観的な情勢が存在しており、その性格を明らかにすることは必要であるが、今日はこの点にはふれず、主として主体的な条件を検討することにとどめたい。

新たに発生した諸傾向のうちの一つの流れは、烽火一派から分裂した共産主義者同盟（全国委員会）ボリシェヴィキ派と赤軍派の一分派であったプロレタリア独裁編集委員会の組織統合であった。新たに形成された共産主義者同盟（紅旗）は綱領を決定し、「綱領上の不一致の上に組織原則はありえない」という主張の下に、綱領による単一党建設を試みた。

紅旗派は一九七六年末から七七年にかけて党内闘争を発生させ、分裂したが、二回大会を開催した分派が紅旗派を継承したようである。二回大会派は、分派闘争の総括を「しかしながら、マルクス主義はひとたび綱領およびテーゼに厳格にうちたてられたからといって、それに止まってよいということはない。それを護符のように神棚にまつりあげて拝んでいてはならない。綱領・テーゼに打ち固めた原則は、日々の実践の中で不断に闘いとり続けねばならない。そうしないならば、ほんの一瞬間でさえ闘いとることをやめるならば綱領はただの紙屑にかわり、党は変質し堕落してしまうだろう。」（『二回大会報告決定集』二三頁）と述べている。だが、このような二回大会派の総括は、実際には、彼らの綱領の内容及び綱領に対する思想とくいちがって来てしまっている。

紅旗派の綱領による統合という路線の特色は、中央集権的な組織を建設してゆくさいの実際的な政治的・組織的活動に十分注意を払わず、綱領文書の一致から全国的政治新聞を軸とした党組織を建設しようとするところであった。実践的な政治的・組織的活動の裏づけをもたず、主として理論的な作業でもって書きあげられた綱領文書の内容そのものも問題であり、その原則的部分に、プロレタリアートの「経済的従属」について述べておきながら、当面の任務がプロ独の樹立と生産手段の国有化であり、当面の任務と原則的部分とが結びついていないという根本的な欠陥、つまり国際党派闘争の回避があるのであるが、このような内容上の誤りと共に、ここで注目しておかねばならないことは、綱領文書の決定から組織統一へというような綱領に対する思想に関してである。

このような綱領に対する思想に従えば、レーニンから借りてきた全国的政治新聞の組織計画も、レーニン主義とは無縁なものに転化せざるをえないことは明らかである。何故なら、こうした思想からは、政治的煽動の任務について、綱領の内容を宣伝煽動するということに矮小化することにならざるをえないからである。従って、二回大会派が批判している「本田一派」なるものの傾向は紅旗派の綱領の内容及び綱領に対する思想に根拠をもったものであった。二回大会派はこのことを隠蔽しつつ、「綱領、テーゼに打ち固めた原則は、日々の実践の中で不断に闘いとり続けねばならない」といったあいまいな主張を対置し、そしてこのようなあいまいな活動が「ほんの一瞬間」でもなくなれば「綱領はただの紙屑にかわ」ると述べているのである。

こうして二回大会派の主張は、紅旗派の綱領に対する思想、「綱領上の不一致の上に組織原則はありえない」という崇高なドグマをなしくずし的に修正するものであった。そして、綱領とは相対的に独自なものである実践的な政治的組織的活動について、紅旗派の綱領に対する思想をきっぱりと批判し総括していないがために明確にすることが出来ず、その結果、せっかくの綱領を「紙屑」にしているのである。

ところで、紅旗派のこのような綱領に対する思想は、実は赤軍派の各分派に広範に見られるものである。赤軍派は一九七二年の連合赤軍の敗北によって党的破産を宣告された党派であった。従って赤軍派の各分派は党的破産を克服すべく努力をかさねてこざるをえなかった。ところがその努力が、綱領草案の提起としてなされてきたことに、赤軍派の各分派が自己の党的破産の根拠に無自覚であったということが表明されているのである。もちろん、われわれは、プロ革派やML派の綱領草案や紅旗派の綱領が、過去の理論的無定見を克服し、各分派の間で理論闘争を定形化してゆくという上で一定の意義をもっていることを否定はしない。しかし、紅旗派に典型的にあらわれた綱領に対する思想は赤軍派が七・六に象徴されている誤まった組織活動における総括と点検をあいまいにしてきたことに根拠をもっているのであり、赤軍派の結成以来の弱点の表現なのである。

従ってこれらの綱領草案の提出は、赤軍派の再建の役に立たず、赤軍派の解体と他派の分派との野合を促進することになったのである。日本赤軍と東アジア反日武装戦線との連携、紅旗派の統合、共産主義者同盟赤軍派（プロ革）と共産主義者同盟游撃派による侵略阻止共闘の結成、共産主義者同盟（国際主義派）との共同作業等々としてあらわれている事態の本質は、赤軍派の根本的な欠陥が正しく総括されないまま、各分派が各々他派の分派と野合し、そうすることによってその欠陥を保存しようとするところにある。こうしてわれわれは現在進行している新しい傾向に対してそれが革命戦争派の単一党建設につながらないことを明確にしなければならないのである。

㈡ 游撃派批判

赤軍派の各分派を軸とした分派の再編が、赤軍派の根本的欠陥を保存するものであること、このことは、赤軍派の各分派と連携している他派の各分派のなかにも同じ欠陥があることを意味している。その典型的な例としてプロ革派と共闘している游撃派の主張をとりあげてみよう。

『游撃』二九号は、ブンド系諸派の組織総括を行なって自からの路線の優位性を示そうとしている。游撃派の路線は「公然領域、合法陣地の強化、拡大をはかり、非合法活動の条件を打ち固めよ」（一八頁）というスローガンに端的に表現されている。

「同盟は非合法党組織の端緒的、基礎的条件の獲得の過程としてある。この非合法党の地下党への移行準備は、公然、合法陣地と、ブルジョア的民主的諸権利が権力によってまだ破壊されていず、かかる分野と領域が広範囲にのこっている時点で、これを合法的諸権利として革命的に利用、活用しうる階級編成の諸領域におけるせめぎあいを要求する。もしそこで召還するならば、合法主義、日和見主義部分に足をすくわれてしまうのであり、党を床の間にかざる結果になるのだ。従って本格的地下非合法体制への転質は、逆に党の成員が旧来以上に公然活動における指導の系統性を発揮すること、その質の建設を厳格に要求するのである」（一八頁）

これは非合法党建設におけるイロハでの混乱である。公然・合法陣地を「革命的に利用」できるのは、公然・合法陣地が非合法党によって指導される場合のことである。游撃派は、自から述べているようにまだ地下党に移行していない。であるならば、現在の彼らの公然・合法陣地は地下党によって指導されているものではなく、したがってまた、非合法党の見地からみて、これを「革命的に利用」するといったことは問題にならないはずである。そこで游撃派は、「革命的に利用」することの出来ないような組織の現実を直視することになく、「革命的地下非合法体制への転質」を提起しているがこれは混乱であり、かつまた幻想ではなかろうか。「革命的に利用」する条件の与えられていない、つまり非合法組織に指導されていない「公然活動における指導の系統性」はいくら発揮されたとしても、合法組織としての指導性であり、質でしかないだろう。

このような非合法党建設における組織上の混乱は、「革命戦争路線の解体止揚物として総蜂起路線の提起」（一九頁）といった政治的主張、つまりは一九六九年以来のブンドの分派闘争に対する政治的態度に裏づけられている。游撃派の前身であった情況派は、ブンド九回大会路線に対して保留し、RG建設へと進まなかった。党の武装に対置するに大衆の武装をもってした彼らの路線も一九六九年～七〇年の階級闘争においてテストされその破産が宣告された。従って、このことの総括をぬきに党の武装にのり移ってみても、「革命戦争路線の解体止揚」といったことは問題にはならないのである。そもそも「革命戦争路線」なるものを「連合赤軍の党内闘争にもっとも象徴的に現われたように、革命戦争路線は、蜂起路線の対極に存在した」（一八頁）というように把えているところからして混乱しており、この主張は連合赤軍の新党を小ブル急進主義の反動化と把え、粛清された部分をプロレタリア革命派とするブロ革派の主張の受け売りであるが、革命戦争路線が蜂起路線の対極にあるといった考え方自体が克服されるべきものなのである。

このような政治態度は当然にもレーニン型の党では革命戦争を組織出来ないとするブンド系諸派のドグマから自由ではありえなかった。「一面的にその党（レーニン主義の党）の原則をその原則の具体的方法にいたってないで取り入れることは、現実的対応性の欠落した全く不合理なものになってしまうのである。このレーニンの組織原則を革命戦争路線に直結させてしまい、その形態的教条化をおこなうことは、結局は自からの階級基礎の獲得を放棄し、召還主義を自己合理化する事を結果せしめる。種々の制約された条件をふまえ、その点に関する保留条件を置いても、やはりその典型はブンド九回大会路線の『非合法軍事の党・軍事を組織する党』ブンド赤報派に典型的に象徴されている。またこのことは図式的に論じてはならないが、レーニンの蜂起を組織する党編成と、革命戦争のための党の編成とはその基準において基本的に矛盾する存在としてあるのだ」（一九頁）。ここで游撃派はレーニン型の党は「革命戦争のための党の編成」とは矛盾すると主張し、このことを根拠としてわれわれの路線を「全く不合理なもの」であると批判している。しかしわれわれがすでに明らかにしてきたように、レーニン型の党は革命戦争を組織出来ない、というブンド系諸派のドグマの方が「不合理なもの」であったのであり、革命戦争路線に対する誤まった観念にもとづく産物として総括されねばならなかったのである。

かくして游撃派が「革命戦争路線の解体止揚」を主張し、またプロ革派が小ブル急進主義の克服を主張するとき、これらの主張は組織活動における総括を欠落させた政治的主張であり、したがって過去の政治的主張の誤まりの克服ではなく、その単なる裏がえしであり過去の誤まりは依然として保存されていることがわかるのである。

㈢ ＭＬ派・国際主義派批判

次に、「共同の論争誌」から全国的政治新聞の実現を主張している部分の見解を見ておく事にしよう。共産主義者同盟ＭＬ派は「新聞を共同して発刊するには、綱領・組織・戦術上の一致、組織的統合が前提にされねばならないが、その条件がない。ではどうするか。国際主義派が『共同した論争誌の発刊』を提起している。これは可能である。いまの条件の下で実現できる。ここで論争し、一致がかちとられれば、論争誌を『共同の新聞』に転化すればよい。（『革命通信』一七号四頁）と述べている。

このようなＭＬ派の見解は、レーニンの全国的政治新聞の計画について、その核心的内容を抜きにし、サークルを統合する機能という見地からのみ把握している。だから、「共同した論争誌の発刊」による「綱領・組織・戦術上の一致」の獲得を展望し、そこから「共同の新聞」に進むというように問題が立てられている。だが、こうした見解は、かの紅旗派の統合の一番せんじではないだろうか。

また、ＭＬ派は何故、各派の独自の機関誌紙によっては論争と一致が勝ちとられず、「共同した論争誌」が必要だと考えているのだろうか。このような見解は自からの分派の機関誌紙の意義を低めてしまうことになると共に、全面的政治暴露を組織することにもとづいた政治的煽動という共産主義者の基本的任務を忘れるものではなかろうか。

そもそも「綱領・組織・戦術上の一致、組織的統合」が全国的政治新聞発刊の前提にされていることと自体が全国的政治新聞の意義についてのレーニンの思想にそむくものである。ブンド系諸派の間の不一致を克服してゆくためにはもちろん論争は不可欠であるが、その論争が現下の共産主義者の基本的任務を解決してゆくことにひきつけて組織されることによってはじめてサークルの間に結びつきを作り出すことが可能となるのであり、そして、この共産主義者の基本的任務とは他ならぬ政治的煽動によって全面的な政治暴露を組織し、労働者階級に対して政治的教育を行うことである。この任務の立ち遅れが今日のわれわれの運動の最大の弱点であり各派が自からの独自の機関誌紙によってこの任務にこたえてゆくなかで単一党の統合の条件が形成されてゆくのである。

ＭＬ派が基本的に賛成した国際主義派の全国的政治新聞の計画に対する考え方も、単一党の指導部が必要であるということと、単一の指導部の下に発刊される新聞がレーニンの全国的政治新聞であるという思想以上のものは含まれていない。彼らにあっても全国的政治新聞はその機能から検討されているだけで、政治的煽動が共産主義者の基本的任務であるという点が何ら考慮されていない。

国際主義派は主張している。「単一の中央指導部のもとに連絡を密にし、集中し、ちょうど軍隊が指揮官の指令のもとに統一して展開するように全国に散在する共産主義者をそのグループ、地方組織が行動してはじめて、分散が積極的、攻勢的意義を持つようになり活動が全国的になるのである。」（『プロレタリィ通信』一一号一頁）「われわれの組織計画は規則的に発行、配布を共同の大事業として設立することである。」（同四頁）つまり国際主義派は、まず単一の指導部を形成し、その下に全国的政治新聞を発行するというものであり、このように問題を把握しているが故に、「共同の論争誌の発刊」といった中間的な手段が提起されてくるのである。

従って国際主義派は、レーニンの全国的政治新聞の計画について主として新聞の機能を検討しているのではあるが、しかし、その機能をも正しく把握していなかったのである。というのはレーニンにあっては、単一の中央指導部を作りあげるということや、多くのサークルと連絡をつけるということが新聞の機能とされているのであり、全面的な政治暴露を組織することにもとづいた政治的煽動を行うような新聞がサークルを統合し中央集権的な党を建設してゆく唯一の手段とされているからである。

ブンド系諸派における新しい傾向は、それぞれレーニン主義の復権をかかげてはいる。しかし、すでに明らかにしたように、各派は共産主義者の基本的任務が政治的煽動を行うことにあることに十分注意を払っていない。紅旗派のように綱領の統一から戦術と組織の統一にとりかかったり、プロ革派や游撃派のように、レーニン型の党では軍は組織出来ないというブンド系諸派の誤まったドグマにしがみついたまま、軍を組織する党を否定することによってレーニン主義に依拠したと考え、合法主義、連合主義を美化してみたり、ＭＬ派や国際主義派のように、「共同の論争誌の発刊」から綱領・戦術・組織の統一を実現し、全国的政治新聞を刊行するというプランを提起したりしているというのが現状なのである。これらのもろもろの諸傾向が実際にはレーニン主義を正しく継承していないにもかかわらず自からをレーニン主義の実践者と規定している原因は、彼らが共産主義者の基本的任務が全面的政治暴露を組織することにもとづく政治的煽動によって、労働者階級に対する政治的教育を行うことにある、というレーニンの提起にそっぽを向いていることにあるのである。これらの諸派のこの偏向は、当然にも組織問題にとどまらず、綱領上、戦術上の偏向と結びついている。このことについてはわれわれは、今後系統的に暴露してゆくであろう。

おわりに

われわれは冒頭で、レーニン主義にもとづく政治的煽動が今日どの党派にあってもなされていないということを指摘した。ブンド系諸派の政治的煽動に対する思想を検討することによってわれわれの指摘の正当性と、われわれが新たに開始しようとしている政治的煽動の性格について明らかにすることが出来た。

ブンド系諸派の政治的煽動に対する思想の誤まりに関しては、その綱領上及び戦術上の誤まりに根拠があることはすでに指摘したことであり、われわれは今後この分野での各派の誤りを明らかにしてゆく活動を強化してゆくであろう。だが、とりわけ決定的に重要なのは、組織上の誤りを克服することである。この問題は、『何をなすべきか』第四章『経済主義者の手工業性と革命家の組織』の継承と政治局＝軍事委員会、ＲＧ＝政治軍隊という国際非合法党の組織的基準との関連で論じられなければならないが、この作業は近いうちに別の論文によってはたされるであろう。われわれは本号掲載の「党建設の新たな段階を切りひらくために（上）」において、われわれ自身の党建設における組織上の誤りの総括を提起しており、本論文もその論文との関連において研究されねばならないものである。

今日、革命的マルクス・レーニン主義に立脚した国際非合法党建設のための条件はいよいよ拡大している。われわれは『赤報』によってレーニン主義にもとづく政治的煽動を行い、共産主義者の任務をはたすことによって、革命戦争派の単一党建設に向けて進まなければならない。

〈了〉

西独赤軍に対する我々の態度

一九七七年一〇月ルフトハンザ機ハイジャックに対して西独帝国主義者が行ったＰＦＬＰ戦士の虐殺・スタムハイム刑務所におけるバーダー、ラスペ、エンスリンの虐殺を我々は許さない。我々は西独赤軍ジークフリート・ハウスナー・コマンドによるシュライヤーの処刑を支持する。「闘いは始まったばかりである。」西独帝国主義者は階級的報復をうけることを覚悟しなければならないだろう。

イタリア、フランス、オーストリア、ギリシャ、イギリスなど欧州全土に発生した抗議の嵐は国際的な革命戦争派の連帯を示した。国際プルジョアジーの血の連帯に対して、国際プロレタリアートはその団結を強化して進むであろう。一九七七年九月から十月にかけた西独赤軍と西独帝国主義者との闘争は七七年四月ブパック連邦検事総長射殺、七月ポンレ・トレスナー銀行頭取射殺と続いた一連の闘争の頂点であった。西独帝国主義者はヨーロッパの帝国主義者共と東独、ソ連の社会帝国主義者に支持され、ソマリアの反動的ブルジョアジーを買収して、ルフトハンザ機の奇襲に成功し、バーダー、ラスペ、エンスリンを殺した。しかし、そのことは、今日の帝国主義ブルジョアジーのプロレタリアートに対する経済的支配が危機に直面しており、西独帝国主義者がそのプロレタリアートに対する階級支配を維持するためには、西独赤軍の血を必要としたということしか意味しないのである。資本に対する賃労働の隷属を永続化させるためのブルジョアジーによるプロレタリアートに対する政治支配―西独赤軍の血によってあがなわれた「民主主義」とはそれ以外のものではありえない。帝国主義者の唱える「基本的人権」とは他ならぬブルジョアジーによる生産手段の独占である。「いまロンドンでは国際的な集まりのたびに、西独首相らの英雄的な闘争がたたえられ、西独側は『いやみなさんの協力のおかげです』と答える」（一〇月二〇日朝日）ブルジョアジー共は西独赤軍の血で乾杯している。だが、今日の帝国主義ブルジョアジーのプロレタリアートに対する経済的支配、日和見主義者、社会排外主義者、社会帝国主義者のブルジョアジーとの協調、「自由」の名の下に行われる被抑圧民族、後進諸国に対する侵略と反革命の強化、これらの諸条件こそが今日の帝国主義国における革命戦争派の存在を根拠づけている。西独赤軍と西独帝国主義との闘争にはブルジョア民主主義の外被の下におおい隠された資本と賃労働の非和解的対立が反映されている。だからブルジョアジーは西独赤軍をも国際的な革命戦争派をも決してうちまかすことはできないのである。

今日の国際階級闘争において帝国主義国におけるプロレタリアートのブルジョアジーに対する内戦と二大陸人民の民族解放戦争との結合はいずれにせよ避けられない。プロレタリアートは、西独赤軍の賃金奴隷であることをのぞまない闘争からプロレタリアートがブルジョアジーと闘争し打倒するために革命的暴力を行使することの意義を学び、自らの経済的解放のための必死の闘争を準備しなくてはならない。

西独赤軍は一九七〇年に西独ＳＤＳ（社会主義ドイツ学生同盟）の中から生れた。米帝のベトナム侵略・反革命戦争の拡大に反対しベトナム民族解放戦争の勝利を支持する帝国主義各国のプロレタリアート人民の闘いが一九六〇年代後半に高まったのとは裏腹に、西独社会民主主義者は一九六六年にキリスト教民主党と大連合し帝国主義ブルジョアジーとのあからさまな融合に進んでいった。ＳＤＳの指導者ドチュウケの暗殺未遂事件、治安警察の弾圧の下での非常事態法の成立は、ＳＤＳに対してプロレタリアートがブルジョアジーを打倒するためには革命的暴力が必要であることを教えた。また一九六八年のチェコ事件はソ連及び東欧の社会帝国主義を革命的に打倒するための闘争の意義をＳＤＳに教えた。一九七〇年のＳＤＳ解散以降、ドイツ共産党、ドイツ共産党（ＭＬ）など毛沢東主義をかかげた諸党がＳＤＳからは生れたが、西独赤軍は帝国主義ブルジョアジーに対する武装闘争の道を選びパレスチナ解放運動及び各国の革命戦争派と結合していったのである。第二次共産主義者同盟が一九六八年及び一九六九年に開催した国際反戦会議に結集した米ＳＤＳからウェザーマン・アングラウンドが生まれ、西独ＳＤＳから西独赤軍が生まれ、第二次共産主義者同盟からは我々共産主義者同盟（ＲＧ）と赤軍派が生まれた。帝国主義国階級闘争における革命戦争派は国際的な潮流である。米帝のベトナム侵略・反革命戦争と結合した各国帝国主義の侵略と反革命の強化は、ブルジョア民主主義の外被にかくされたプロレタリアートに対するブルジョアジーの独裁をあらわにしたのであり、各国の革命的プロレタリアートに武装の必要性と非合法組織の結成の必要性を教えたのである。

我々は西独赤軍の闘争をその国際主義とブルジョアジーに対する組織された暴力の行使とにおいて支持する。西独赤軍をテロリズムであると非難する人々は日本赤軍をテロリズムであると非難する人々と同様に誤っている。西独赤軍の闘争は西独における階級闘争の状態に基盤を持っており、西独社会民主主義者の帝国主義との融合、「労使共同決定法」に象徴される階級協調と徹底的な反共主義、「過激派」に対する結社の禁止、弁護人との接見制限、共産主義者の公職への就職を禁止した職業禁止条例等々、西独社会のすみずみにまではりめぐらされた共産主義者と革命家に対する戒厳状態に基盤を持っている。西独の帝国主義ブルジョアジーが社会民主主義者を政権につけることによって、その新植民地主義を中東、アフリカ、中南米等々に対して実行しつつ、プロレタリアートの上層（ドイツ労働総同盟の指導部に代表される）を買収し、革命的プロレタリアートに対しては無制限の強権をもってのぞんでいる以上、西独赤軍の闘争が革命的インテリゲンチャのみならず革命的プロレタリアートの一部によっても支持されているのは何ら不思議ではありえない。同様に、西欧における社会民主主義者及び社会帝国主義者のそれぞれの仕方でのブルジョアジーとの結合の強化、ブルジョア的労働運動の存在は、西欧における革命戦争派と西独赤軍との結合を促しているのである。西独赤軍の闘争は資本に対する賃労働の非和解的対立はどのようなブルジョアジーの弾圧や労働貴族に対する買収があろうとも必ずその表現の水路を見出してあらわれざるをえないことの反映である。そうだとすれば、資本のくびきから自らを解放すべきプロレタリアートの闘いの勝利

〈七面へつづく〉

党建設の新たな段階を切り拓くために（上）

＝10.13以前の政治警察との闘争の教訓＝

〈序〉

一九七六年一〇・一三検挙攻撃から一年有余、われわれは二度目の新年を迎えた。この一年有余の政治警察に対するわれわれの反撃は、中央集権主義の組織思想に従い、政治局＝軍事委員会・RG＝政治軍隊という国際非合法党の組織的基準を防衛しつつ、党建設の新たな段階を切り拓く闘いであった。このわれわれの反撃は、われわれが党建設の第二段階における政治警察との闘争の経験の蓄積を糧とし、第二段階においてすでに部分的に準備されていた党建設の新たな段階を切り拓く闘いを継承しつつ、一〇・一三の教訓に徹底して学ぶことによってなしとげられてきたものである。

われわれは、党建設の第二段階におけるこのような準備があったがゆえに、党中枢に対する検挙攻撃を許すという大きな傷手に直面したにもかかわらず、整然と反撃に移り、党建設の新たな段階への第一歩を力強くふみ出すことが出来た。われわれは、第二段階の闘いの基本的な正しさに、確信と誇りを持っている。と同時に、われわれは、われわれが党建設の新たな段階を切り拓くためには、第二段階の活動の全ての分野、綱領といわず、戦術といわず、組織といわず、あらゆる点にわたって、厳しく点検がなされ、欠陥がつき出され、総括され、教訓が学びとられなければならないことを知っている。

以下に明らかにするのは、われわれの党建設の第一、第二段階の党活動に対する思想的総括と一〇・一三攻撃によって逮捕された同志のうちの二名の同志の自供問題総括についての中央委員会の提起である。今回は、その前半が掲載される。われわれは読者諸君が積極的に意見を寄せることによって、共同事業に加わることを要請するものである。日本における非合法党の組織活動の経験は未だ未熟なものであり、革命戦争派の単一党建設のためには、非合法党の組織活動が広範な革命的プロレタリアート・被抑圧大衆の間でわがものとされるような状態をつくりだす必要がある。われわれの提起は、そのための一素材となるであろう。

(A) 全国的政治新聞の意義について

(一) 自供問題に対するわれわれの態度

一九七六年一〇月一三日をもって開始された政治警察によるわれわれに対する一斉検挙攻撃のなかで、二人の同志が政治警察の取調べに屈服し、自供した。A同志は病気療養中であり、B同志は降格処分中であったという事情があったけれども、二人とも党建設の第一段階以来のRGであり、われわれは、二人の同志の自供を党建設の第二段階の欠陥の露呈として受けとめている。

このことの一つの意味は、そもそもA同志の病気が第二段階の組織活動のなかでおきたものであり、他方、B同志の降格については、彼を復帰させることに立ち遅れたというように、屈服し自供した二同志の弱点が、第二段階の弱点を具体的に表現したものであったということである。だが、われわれはさらに進んで、二同志の屈服と自供が第二段階におけるわれわれの路線そのものの弱点を示しているという意味においても受けとめ、総括しなければならないのである。したがって、われわれの自供総括は、党建設の第二段階の弱点を克服し、党建設の新たな段階を切りひらく闘いの一環としてなしとげられねばならない。

またわれわれは、党員の自供総括を党組織の内部のみで済ますことは誤りであると考えている。逮捕勾留された時における政治警察との闘争は、階級闘争の重要な構成部分の一つであり、したがって、そこにおけるわれわれの同志の敗北は、大衆的に明らかにされ、大衆的にその教訓が学びとられなければならないのである。このような方法で総括を進めることによってはじめて、われわれは労働者階級を非合法党と結合させてゆくための訓練に自供総括を役立てることができるのである。

ところで、A同志とB同志は、完黙で闘ったC同志とともにRGの一つの隊を形成していた。仮りにD隊としておくが、A同志とB同志の屈服と自供は、同時に、このD隊の合法主義への隊のレベルの低下、分権主義による一九七六年四月以降の政治警察との闘争での敗北の帰結でもあった。したがってわれわれは、まず、一九七六年四月をもって開始された政治警察とD隊との攻防戦における問題点を手がかりに、党建設の第二段階の総括を政治警察との闘争における教訓を学ぶことにひきつけて明らかにしてゆきたい。この作業は、現在われわれが進めている党建設の第二段階、及び一〇・一三問題についての全党的総括の一部分をなすものである。

(二) 文書を軸にした党活動への転換と党内公開制

今日公開しうる形で述べるならば、すなわちこれまでの公判廷において開示された検察側証拠によれば、D隊が政治警察によって発見された契機は、D隊と連絡のあった活動家E君がマークされており、C同志がE君との接触を秘密活動の原則に従って遂行していなかったことによるものであった。政治警察は、C同志を発見して以降数ヶ月後の四月には公然とC同志を包囲し、われわれの反応を探り、すでに発見していた各点から点を結んで線をつくり、われわれの行動の法則を研究して党組織の全体を解明しようとする戦術に出たのである。

われわれは、一九七四年にF同志が偶然に逮捕されて以降、党組織と支持者との間の連絡については、文書連絡を基本とし、直接の接触を避けるようにしていた。

われわれは、政治警察が公然とC同志を包囲した段階で、われわれのそれまでの組織活動の仕方を再検討した。そして、党組織と支持者との間の文書連絡が徹底して守られなかった原因は、党内における組織の運営が文書を軸としたものに転換されておらず、党内では会議（直接の接触）による組織活動がなされたままで、単に党組織と支持者との間のみを文書連絡に切り換えるという、文書を軸とした活動への転換における不徹底さにあると総括した。

つまり、党内部で文書を軸とした活動がなされていないならば、党組織と支持者との関係を文書連絡にしたところで、文書連絡に関して党内部が訓練されていないがゆえに成功するはずはなく、したがって定められていた文書連絡によっては、活動が十分に展開しきれずに、直接の接触による会議を持つということにならざるを得なかったのである。

こうして、F同志が逮捕されたことの総括として打ち出された党組織と支持者との間の文書連絡ということは、当時においては、政治警察との闘争に対して有効な方策であるかの如く思われていた。しかし、それは単なる技術的な解決でしかなかったのであり、この技術を使いこなす内実を党組織が持たねばならず、そのためには党活動全体を転換させねばならない、ということが問われていた。この転換の手段に無自覚であったがために、この方策は破綻せざるを得なかったのであった。

四月下旬のC同志に対する包囲を契機に、党活動総体を、会議を軸とした活動から文書を軸とした活動へと転換させねばならないことが明らかとなり、そのための措置が講じられた。しかし、この転換は、口先で述べる分には簡単であるが、実際に実施するとなるとすでに述べたように、この転換は、単に党活動の技術的方法の変更ということを意味するのみならず、党活動の質的転換を要求するものであることが鮮明になってきた。すなわち、我々は四月以前から党建設の第二段階を終了させ、党活動の転換を勝ちとるための準備をすすめていたが、四月にはじまる政治警察との闘争によって問われた問題は、われわれが進めていた党建設の第二段階を終了させ党活動の転換を勝ちとるということと深くかかわっていたからである。

文書を軸とする以上は会議とは別のかたちで党内公開制を保障しなければならなかった。そして、この党内公開制の保障ということが、実は党活動を転換させるカナメの位置を占めていた。この党内公開制というものは、単に党内で文章を公開するということを意味するだけではなく、党内情報を組織し、党活動を定形化し、思想闘争・党内闘争を組織するための手段である。それはまた、指導を中央集権化させるという組織原則を実現する手段でもある。このような意義をもった党内公開制を真に保障してゆくためには、プロレタリアート及び被抑圧大衆と真に結びついた全国的政治新聞と結合された党内公開制でなければならないということが、文書を軸にした活動にちょっととりかかっただけで明確になっていった。なぜなら、プロレタリアート、被抑圧大衆の生活と闘争の生き生きした情報から切断された党内情報を組織してみても、それは革命的なマルクス・レーニン主義党の組織活動とはいえないからであり、またプロレタリアート被抑圧大衆に対する政治的教育の役に立たないからである。

(三) 党内公開制の保障と全国的政治新聞の意義の再検討

こうして、問題は『赤報』発刊の立ち遅れの総括へと進んでいった。われわれは、これまで『赤報』を政治的煽動のための全国的政治新聞として位置づけて発行してはこず、いわばそのような全国的政治新聞の計画を実現してゆく前段階の活動として位置づけていた。このこと自体は、われわれの組織の実態から制約されたところの歴史的な規定であった。ところが、第二段階を終了させるにあたって、党活動を文書を軸とした活動へと転換し、党内公開制を真に保障しなければならないということが日程にのぼった段階で、全国的政治新聞に対する旧来のわれわれの考え方を克服することを迫られたのである。

われわれが党活動における全国的政治新聞の意義についての旧来のわれわれの考え方の誤りを克服したとしても、それだけでは『赤報』が全国的政治新聞に飛躍するわけではないし、それは依然として、全国的政治新聞の計画を準備するものとしての性格を持ったものであるだろう。しかし、重要なことは、旧来のわれわれの考え方の誤りを克服しなければ、「規則的で完全な意味での共同的な事業」（レーニン）としての全国的政治新聞の計画を準備し、実現してゆくことができない、ということにあった。つまり、全国的政治新聞の計画に対する旧来のわれわれの考え方が誤っていたものであったがゆえに、この誤りを克服することなしには、レーニン的意味での全国的政治新聞の計画を実現してゆくことができないということであり、また、したがって、全国的政治新聞の計画と不可分に結びついている文書を軸にした党活動をも実現できないのだ、ということが明らかになっていったのであった。そしてこのことは政治的煽動に関する従来の我々の考え方それ自身をも点検し、飛躍をかちとらなければならないということでもあった。

こうして、当初は文書を軸にした党活動をつくりあげ、政治警察の攻撃に対して闘争し、これに勝利しうる組織を建設するための不可欠の課題から出発したわれわれの闘いは、必然的に党活動における全国的政治新聞の意義についての再検討へと煮つまっていったのである。

われわれは、一二・一八ブンド以来のレーニン型組織についての把握を点検し、「レーニン型の党では軍を組織できない」というブンド系諸派の間に広範に存在していたドグマを内部文書で批判した（一九七六年九月に内部文書として提出されたものに手を加えて、『RG救対ニュース』二号に部分的に公表されたこの文書を末尾に再録しておく）。この文書の主要な結論は、次のようなものであった。ブンド系諸派は、全国的政治新聞の機能に主として注目し、この機能による党建設というようにレーニン型の党を把えた上で（このような把握の裏には、われわれがすでに党建設の第一段階において明らかにしておいたように、ロシア革命以降の、それもスターリンによって指導されたボルシェヴィキ化運動における党の型を、レーニン型の党と把えていたという誤りもあった）、このような党の型では軍を指導できないと考えていたのであった。つまり、新聞の機能は直接には軍の機能を含んでおらず、軍の機能を持った党はレーニン型の党ではないのだというように考えていたのであった。

だが、これはレーニンの党の型の理論に対する一知半解に基づく誤ったものであった。党が軍の機能を持つということは、レーニンが提起しているような意味における党の型の問題ではなく、党の機能と質の問題であり、今日における国際非合法党の組織的基準であった。

レーニンの党の型についての理論は、党の個々の機能について規定したものではなく、あらゆる事態に対して用意のある組織ということであった。そして、このような組織は、党活動の基本的内容に全人民的政治的煽動をおき、全国的政治新聞を規則的に発行し、全面的な政治暴露を組織することに基づいた政治的煽動によって労働者に対し政治的教育を行い共産主義的政治を実現するような組織であるとし、このような内容を党の型という言葉でもって表現していたのである。

以上のこの文書で述べられた内容の他に、レーニンの党の型についての誤った理解として、もう一つの解釈があることをあげておかねばならない。それは、党の型を革命の型によって規定されるものと考え、レーニン型の党を全人民的武装蜂起という戦術によって規定されたものと解釈し、そして今日では革命の型は世界革命戦争だから党の型もレーニン型の党とは異なってくるのだ、といったものである。この解釈が新聞によっては事を組織できないという考えと結合されると、レーニンの時代に政治的煽動の機能を果たしたものは新聞であり、それがレーニンの党建設の環となったが、今日の革命戦争の時代においては、軍が政治的煽動を担うのであり、軍が党建設の環であるという主張がなされてくるのであった。だが、すでに明らかにしたように、レーニンは党の型を規定するにあたり、革命の型や当面の主要な闘争形態とはかかわりなく遂行できる活動に求めていたのであり、革命の型から党の型を規定するという思想は、あらゆる事態に対して用意のある組織というレーニンの党の型についての思想とは全く正反対のものだったのである。

こうしてブンド系諸派は、一方でレーニンの党の型の理論を全国的政治新聞の機能に矮小化し、他方では革命の型から党の型を規定することであると把え、そうすることによって、レーニン型の党では革命戦争の時代の軍を組織する党を指導することはできないという結論を導いていたのであった。しかし、このような理解は誤ったものであり、レーニンの党の型の理論を正しく復権するならば、レーニン型の党には当然にも軍を組織するということに対しても用意があるということなのである。

(四) 全国的政治新聞の「計画」についてのレーニンの思想

一九七六年九月の内部文書の段階では、われわれは、共産主義一四号政治局論文に対象化されている、一二・一八ブンド議長三谷の「組織論メモ」を批判することによって、レーニンの全国的政治新聞の計画についての正しい理論に到達していた。このわれわれの到達地平をうちかため、実践の指針としていくために、ここで『赤報』二号巻頭論文の総括を行っておきたい。なぜなら、七一年秋のわれわれの党名改称以降の党文献において、全国的政治新聞の役割についてふれているのは『赤報』二号論文であるからであり、この論文にわれわれが一二・一八ブンドをどのように継承発展させたのかが、その歴史的限界も含めて示されているからである。すなわち、『赤報』二号論文ではわれわれは、「マルクス・レーニン主義党を継承発展させるといっても、何から何までレーニン党の引き写しをやったら良いのではない」と述べた上で、レーニン党から継承すべき「党組織における中心的な思想」について、①として、中央集権主義の思想をあげた上で、②として、革命戦争を組織する党として、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核として、党組織を非合法軍事組織としてつくりあげねばならないことについて述べている。そして③では、Ⓑ全国的政治新聞は以上二点を基礎とした上で党の思想的指導の一端を荷なうものとして発行されねばならない」とした後で、レーニンのようにイスクラ編集局と中央委員会といった二つの指導中心を設けるのではなく、政治局＝軍事委員会の下に全国的政治新聞を発行するものであることを断わった上で、「この前提の上に立って、新聞・リーフレット・その他の秘密出版・軍事的規律をもった文書配布網の形成は、党の中央集権主義を確保し、党内情報を組織する点でも、革命戦争の遂行にむけて、現在ある種々のグループを統合し、運動の手工業性を克服する点でも、われわれが軍事組織として党組織を建設する場合の一つのカナメとして行われなくてはならない」（『共産主義』一六号一四～五頁）と述べている。

ここでは、全国的政治新聞はその機能において一面的に把握され

ている。当時のわれわれは政治局＝軍事委員会、ＲＧ＝政治軍隊を中核とする党建設を押し進め、七一年末から七二年初めにかけての政治警察との闘争を組織しながら、党建設の第二段階を宣言したのであった。そしてなおかつわれわれは赤軍派、日共革命左派との党派闘争を組織しながら、党の蜂起にむかって進んでいた。われわれが当時レーニンの全国的政治新聞の計画を一面的にとらえていたのは、歴史的には正当なことであったのであり、むしろ、われわれが党の蜂起を真剣に追求しながら、なお全国的政治新聞の意義を強調したことこそ、正しく評価されなければならない。そのことをふまえて、今日『赤報』二号論文の歴史的限界をレーニンに即して総括するなら、以下のようになるだろう。

『何をなすべきか』第五章全国的政治新聞の「計画」で、レーニンは、この「計画」が「すべての側面から組織の建設に着手することのできるように一定の組織計画をつくりあげる」試みのためのものであることを理解しなかった人々に対する反論と、『イスクラ』を非公式の機関紙として発行することになったいきさつを述べている。その上に立って、この「計画」そのものの説明を試み、「新聞は集団的組織者になることができるか」という問題について考察している。レーニンは、そこで、エリ・ナデジヂンの反対意見に反論しつつ、四点にわたって新聞の組織者としての役割を明らかにしている。

第一は、強力な政治組織を育てあげる手段としての役割であり、新聞がいろんな側面からいますぐそれの建設に着手できるための実践的な解決であるということである。第二は、生き生きとした政治的活動を遂行するための生き生きした政治的煽動をなしとげる役割である。この役割によって、組織をたゆむことなく発展させ、深め、拡大することができるのである。第三は、統一的闘争の指導や総攻撃のために、すべての革命的勢力を集め、組織する役割である。第四は、サークルを統合するための規則的な共同行動に基づく実際上の結びつきをつくりだす役割である。

レーニンは、これらの役割について述べた後、全国的政治新聞の意義について述べている。「もし地方委員会や地方的グループやサークルの全部またはそのかなりの多数に、積極的に共同事業に着手させることが実際にできるなら、われわれは、全ロシアにわたって数万の部数で規則的に配布される週刊新聞を、ごく近い将来に発行することができよう。この新聞は、階級闘争と人民の憤激の一つ一つの火花をおこして全般的な火事にする巨大なふいごの一小部分となるであろう。それ自体ではまだはなはだ罪がなく、はなはだ小さいが、しかし規則的で、完全な意味で共同的なこの事業を中心にして、試練を経た戦士の常備軍が系統的に選抜され、訓練されてゆくであろう。」（『何をなすべきか』レーニン全集五巻五五一頁、国民文庫版二五〇頁）

このように、レーニンは、新聞発行ということそれ自体では「はなはだ罪がなく、はなはだ小さい」活動であるが、それが「規則的で、完全な意味で共同的な」事業となった場合に、巨大な意義をもち、大きな役割を果たすことができるということを明らかにしている。だから、この事業が多くのサークルによって共同的な事業として支えられなければ、それは罪のない活動に終わってしまわざるを得ないのである。

ところで、以上で述べた全国的政治新聞の役割と意義は、活動の実際的側面からの考察によるものであった。そこでは、党の第一回大会直後に破壊されたロシア社会民主党をどのように再組織してゆくかという問題に対する回答がなされていたのである。

次にレーニンは、「われわれはどのような型の組織が必要か」と問い、この全国的政治新聞の「計画」を党の型との関連で考察している。

「『イスクラ』のように、その綱領といわず、戦術といわず、組織活動といわず、いっさいのものの重点を全人民的な政治的煽動におくものこそ、革命を見おとすおそれは最も少ないのである。……爆発や市街戦だけを予定したり、あるいは『平凡な日常闘争の漸進的な歩み』だけを予定して、党組織を建設するのは、このうえない誤りであろう。われわれはつねにわれわれの日常活動を遂行しなければならないし、またつねにあらゆる事態にたいする用意をもっていなければならない。なぜなら、爆発の時期と沈静の時期との交替をまえもって予見することは、ほとんど不可能な場合がきわめて多いし、またそれが可能な場合でも、この予見を組織のつくりかえに利用することは、とてもできないからである。……わが党組織の活動の基本的内容、この活動の焦点をなすものは、最も強力な爆発の時期にも、最も完全な沈静の時期にも同様におこなうことができるし、またおこなう必要があるような活動でなければならない。すなわち、全ロシアにわたって統合され、生活のいっさいの側面を解明する、最も広範な大衆を対象とした政治的煽動の活動が、それである。ところで、今日のロシアではこのような活動は、きわめて頻繁に発行される全国的新聞なしには考えられない。」（同書、五五六～八頁、同版二五七～九頁）

このように、政治的煽動を党組織の活動の基本的内容とする組織が、革命を見おとすおそれが最も少なく、多種多様な急変する闘争条件に即応する能力を持ち、あらゆる事態に対する用意を持った組織であるということをもって、レーニンは「どのような型の組織が必要か」という問いの回答としているのである。このレーニンの党組織の型は、全面的政治暴露を組織することに基づいて政治的煽動を行うという社会民主主義者の基本的任務を実現するということと深くかかわっている。したがって、労働者階級に対する政治的教育を全面的政治暴露を組織することに基づいた政治的煽動によって行うという任務をはっきりと自覚し、労働運動の自然発生性との必死の闘争が必要であるということを十分把握していないと、このレーニンの党の型についての思想を本当の意味で理解することはできないのである。

このような型の組織がまた、当面する革命における党の任務を解決できる唯一のものなのである。レーニンは、先の引用文の後に直接続く部分で、「この新聞を中心としてひとりでに形づくられる組織、この新聞の協力者たち（最も広義の協力者たち、すなわちこの新聞のために働く人々の全部）の組織こそ、まさに革命の最大の『沈滞』の時機に党の名誉と威信と継承性を救うことに始まって、全人民の武装蜂起を準備し、指定し、実行することにいたるまでの、あらゆる事態にたいする用意をもった組織であるだろう。」（同書、五五八頁、同版二五九頁）と述べ、また第五章の末尾では、「一言でいえば、『全国的政治新聞の計画』は、空論主義や文筆家気質に感染した人々の書斎仕事の産物（この計画をろくろく考えてみなかった人々の目にはそう見えたのだが）でないばかりか、反対に、あらゆる側面からいますぐ蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊要な日常活動をただの一瞬間も忘れない、最も実践的な計画なのである。」（同書五六〇頁、同版二六二頁）と述べて、この型の組織こそが、当面する革命における党の任務である武装蜂起の組織をも、将来の問題としてではなく、今日の実践上の問題として提起することになるということを強調している。こうして計画は、党の再組織を勝ちとるものであるばかりでなく、あらゆる事態に対して用意のある組織という型の党を建設するものであり、そうすることによって、当面する革命における党の任務を平時から準備し、「終局目標」そして特にプロレタリアートの独裁という綱領上の内容を実践上の問題として提起するということを解決しているのである。

以上で簡単にふれたように、『何をなすべきか』第五章の内容は、まず、新聞の組織者としての役割をロシア社会民主党の再組織にひきつけて明らかにし、そのうえにたって、全国的政治新聞の「計画」が、党組織の活動の基本的内容を全人民的政治的煽動におく、あらゆる事態に対して用意のある組織をつくりあげることを明らかにし、そしてこのような組織のみが、当面する革命における党の任務を平時から準備することができることを示しているのである。

われわれが、『赤報』二号の段階において、レーニンの党の型についての思想を正しく復権し得ず、全国的政治新聞の機能にのみ注目し、あらゆる事態に対して用意のある組織という党の型との関連でそれを把えなかったことは、明らかに、われわれが党建設の第一段階において党の蜂起をかかげ、革命戦争を再開することを通して、一二・一八ブンドの党組織を政治局＝軍事委員会、ＲＧ＝政治軍隊、スターリン組織観の克服のスローガンの下に改組しようとしていたことと、深くかかわっている。われわれは、この党建設の第一段階において、国際非合法党の組織的基準を獲得したのであり、このことを抜きに、レーニンの『何をなすべきか』を正確に解釈したとしても、頭の中の知識にとどまり、実践の指針として今日の階級闘争に生かすことはできなかったであろう。われわれは『赤報』二号以降、連合赤軍の粛清と銃撃戦に直面し、連合赤軍の闘争を最も正しく評価しつつ、なだれうつ清算主義と闘争しながら、われわれの歴史的制約をも踏み越えてきた。われわれの今日の到達地平は、一〇・一三に至るわれわれの五年間の非合法活動の経験を定形化し、総括する作業の中で、われわれが闘いとったものである。

以降、党建設の第二段階において、われわれは、レーニンの組織計画が「終局目標」そして特にプロレタリアートの独裁という綱領的内容を射程に入れたものであることを明らかにし、革命戦争や武装闘争を否定するという意図をもってレーニンの「正規の攻囲軍」や「全人民的政治的煽動」や「全国的政治新聞の計画」を提起する傾向と闘ってきた。そして党建設の第二段階における階級闘争に対するマルクス主義の原則の復権によって、中央集権主義の組織思想を後述するような限界を含みつつも実現し、政治警察との闘争の経験のなかから、文書を軸とした活動への転換を試み、党内公開制の保障の問題を解決する闘いのなかで、レーニンの全国的政治新聞の計画についての理論を復権する条件が整えられていったのである。

先にも示唆したように、全国的政治新聞の計画を党の型との関連で把握するということは、党活動の基本的内容を全人民的政治的煽動におくということの決定的意義を明らかにすることを抜きにすれば、内容のないものにならざるを得ない。レーニンが全人民的政治的煽動をなぜ社会民主主義者の基本的任務としたのか、ということに関しては、一面論文を参照されたい。この問題が正しい資本主義批判と深く結びついたものであることについては、すでに『赤報』二二号で述べられている。

(B) 中央集権主義の思想について

(一) 文書を軸にした党活動への転換によって問われた問題

会議を軸とした党活動から文書を軸とした党活動へと転換するために、党内公開性の保障を全国的政治新聞の意義と党の型についてのレーニンの思想の復権によって解決しようとしたとき、同時に、中央集権主義の組織の思想に対するわれわれの旧来の把握もテストされることとなった。

われわれは、党建設の第一段階においてみられた、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化という組織原則と秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化という組織政策との混同について、第二段階で総括し、両者の区別を明らかにすることによって、非合法党建設の組織問題に関する諸問題を解決してきた。だが、われわれは、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化という組織原則が、党内公開制の保障という問題に対する回答がなされていたのである。

次にレーニンは、「われわれはどのような型の組織が必要か」と問い、この全国的政治新聞の「計画」を党の型との関連で考察している。

「『イスクラ』のように、その綱領といわず、戦術といわず、組織活動といわず、いっさいのものの重点を全人民的な政治的煽動におくものこそ、革命を見おとすおそれは最も少ないのである。……爆発や市街戦だけを予定したり、あるいは『平凡な日常闘争の漸進的な歩み』だけを予定して、党組織を建設するのは、このうえない誤りであろう。われわれはつねにわれわれの日常活動を遂行しなければならないし、またつねにあらゆる事態にたいする用意をもっていなければならない。なぜなら、爆発の時期と沈静の時期との交替をまえもって予見することは、ほとんど不可能な場合がきわめて多いし、またそれが可能な場合でも、この予見を組織のつくりかえに利用することは、とてもできないからである。……わが党組織の活動の基本的内容、この活動の焦点をなすものは、最も強力な爆発の時期にも、最も完全な沈静の時期にも同様におこなうことができるし、またおこなう必要があるような活動でなければならない。すなわち、全ロシアにわたって統合され、生活のいっさいの側面を解明する、最も広範な大衆を対象とした政治的煽動の活動が、それである。ところで、今日のロシアではこのような活動は、きわめて頻繁に発行される全国的新聞なしには考えられない。」（同書、五五六～八頁、同版二五七～九頁）

このように、政治的煽動を党組織の活動の基本的内容とする組織が、革命を見おとすおそれが最も少なく、多種多様な急変する闘争条件に即応する能力を持ち、あらゆる事態に対する用意を持った組織であるということをもって、レーニンは「どのような型の組織が必要か」という問いの回答としているのである。このレーニンの党組織の型は、全面的政治暴露を組織することに基づいて政治的煽動を行うという社会民主主義者の基本的任務を実現するということと深くかかわっている。したがって、労働者階級に対する政治的教育を全面的政治暴露を組織することに基づいた政治的煽動によって行うという任務をはっきりと自覚し、労働運動の自然発生性との必死の闘争が必要であるということを十分把握していないと、このレーニンの党の型についての思想を本当の意味で理解することはできないのである。

このような型の組織がまた、当面する革命における党の任務を解決できる唯一のものなのである。レーニンは、先の引用文の後に直接続く部分で、「この新聞を中心としてひとりでに形づくられる組織、この新聞の協力者たち（最も広義の協力者たち、すなわちこの新聞のために働く人々の全部）の組織こそ、まさに革命の最大の『沈滞』の時機に党の名誉と威信と継承性を救うことに始まって、全人民の武装蜂起を準備し、指定し、実行することにいたるまでの、あらゆる事態にたいする用意をもった組織であるだろう。」（同書、五五八頁、同版二五九頁）と述べ、また第五章の末尾では、「一言でいえば、『全国的政治新聞の計画』は、空論主義や文筆家気質に感染した人々の書斎仕事の産物（この計画をろくろく考えてみなかった人々の目にはそう見えたのだが）でないばかりか、反対に、あらゆる側面からいますぐ蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊要な日常活動をただの一瞬間も忘れない、最も実践的な計画なのである。」（同書五六〇頁、同版二六二頁）と述べて、この型の組織こそが、当面する革命における党の任務である武装蜂起の組織をも、将来の問題としてではなく、今日の実践上の問題として提起することになるということを強調している。こうして計画は、党の再組織を勝ちとるものであるばかりでなく、あらゆる事態に対して用意のある組織という型の党を建設するものであり、そうすることによって、当面する革命における党の任務を平時から準備し、「終局目標」そして特にプロレタリアートの独裁という綱領上の内容を実践上の問題として提起するということを解決しているのである。

以上で簡単にふれたように、『何をなすべきか』第五章の内容は、まず、新聞の組織者としての役割をロシア社会民主党の再組織にひきつけて明らかにし、そのうえにたって、全国的政治新聞の「計画」が、党組織の活動の基本的内容を全人民的政治的煽動におく、あらゆる事態に対して用意のある組織をつくりあげることを明らかにし、そしてこのような組織のみが、当面する革命における党の任務を平時から準備することができることを示しているのである。

われわれが、『赤報』二号の段階において、レーニンの党の型についての思想を正しく復権し得ず、全国的政治新聞の機能にのみ注目し、あらゆる事態に対して用意のある組織という党の型との関連でそれを把えなかったことは、明らかに、われわれが党建設の第一段階において党の蜂起をかかげ、革命戦争を再開することを通して、一二・一八ブンドの党組織を政治局＝軍事委員会、ＲＧ＝政治軍隊、スターリン組織観の克服のスローガンの下に改組しようとしていたことと、深くかかわっている。われわれは、この党建設の第一段階において、国際非合法党の組織的基準を獲得したのであり、このことを抜きに、レーニンの『何をなすべきか』を正確に解釈したとしても、頭の中の知識にとどまり、実践の指針として今日の階級闘争に生かすことはできなかったであろう。われわれは『赤報』二号以降、連合赤軍の粛清と銃撃戦に直面し、連合赤軍の闘争を最も正しく評価しつつ、なだれうつ清算主義と闘争しながら、われわれの歴史的制約をも踏み越えてきた。われわれの今日の到達地平は、一〇・一三に至るわれわれの五年間の非合法活動の経験を定形化し、総括する作業の中で、われわれが闘いとったものである。

以降、党建設の第二段階において、われわれは、レーニンの組織計画が「終局目標」そして特にプロレタリアートの独裁という綱領的内容を射程に入れたものであることを明らかにし、革命戦争や武装闘争を否定するという意図をもってレーニンの「正規の攻囲軍」や「全人民的政治的煽動」や「全国的政治新聞の計画」を提起する傾向と闘ってきた。そして党建設の第二段階における階級闘争に対するマルクス主義の原則の復権によって、中央集権主義の組織思想を後述するような限界を含みつつも実現し、政治警察との闘争の経験のなかから、文書を軸とした活動への転換を試み、党内公開制の保障の問題を解決する闘いのなかで、レーニンの全国的政治新聞の計画についての理論を復権する条件が整えられていったのである。

先にも示唆したように、全国的政治新聞の計画を党の型との関連で把握するということは、党活動の基本的内容を全人民的政治的煽動におくということの決定的意義を明らかにすることを抜きにすれば、内容のないものにならざるを得ない。レーニンが全人民的政治的煽動をなぜ社会民主主義者の基本的任務としたのか、ということに関しては、一面論文を参照されたい。この問題が正しい資本主義批判と深く結びついたものであることについては、すでに『赤報』二二号で述べられている。

ばならない。ということは、プロレタリアートの革命運動が、ブルジョアジーを打倒し、ブルジョア国家を粉砕して、プロレタリアートの独裁を樹立し、それをテコとして社会の共産主義的変革を行わなければならないということに基づくものであり、プロレタリアートの革命運動の特質によって規定されたものである。それは、プロレタリアートの革命政党の最も重要な性格のうちの一つを規定したものである。ところが、これに対して、指導の中央集権化ということは、党に対する責任の地方分散化をその必須の補正手段とするとされていることからも分かるように、プロレタリアートの革命政党の性格やその機能について規定したものではない。この組織原則は、まさに、運動に対して中央集権的な指導を行うことができるような中央集権的な革命党を建設し、組織してゆく場合の原則なのである。この混同を克服することが、党活動の質的転換を成し遂げるためには必要であった。

第二は、指導の中央集権化を党中央に属する事項とし、党に対する責任の地方分散化を党のその他の諸機関に加わっている人々に属する事項として、切り離して把握する傾向の克服である。このような傾向は、中央集権主義の組織思想を組織思想として把握していないとともに、第一に述べた党の中央集権的な指導と指導の中央集権化との混同に基づくものであった。そしてこの傾向は、党に対する責任の地方分散化ということ自体についての把握をも誤ったものにせざるを得なかった。というのは、党に対する責任の地方分散化というのは、指導の中央集権化と結びついた事柄であり、それゆえ単に構成員が自分の義務を党に対する責任として果たすだけではなく、党に対する責任をさらに広範に地方分散化することによって指導を中央集権化するということが含まれているからである。ところが、指導の中央集権化と切り離された党に対する責任の地方分散化の理解は、党に対する責任ということを、党員及び党を支持する人々の党と運動に対する義務と混同し、党と運動とに対して各自がその仕事を果たすことによってその義務を担うことを、もっぱら党に対する責任を果たすこととして受けとめることになっていたのである。

これでは、党に対する責任は全然地方分散化されず、またその結果として、指導の中央集権化のための必須の補正手段としての意味も持たないものとなった。党に対する責任は、義務と混同されることによって、運動に対する中央集権的な指導をつくりだすための指導の中央集権化とは区別された事柄としてみなされ、党活動を展開する上で、指導上の責任をあいまいにし、指導の中央集権化をあいまいにして、単に自己に与えられた仕事を義務として受けとめ、そつなく果たしてゆくといった受身の活動スタイルを形成していったのである。このような傾向を克服することなしには、文書を軸にした党活動は一歩も前進することはできなかったし、政治警察との闘争に勝利することは出来なかった。

第三に、規律に対する服従という思想を克服し、決定に対する服従という思想を確立することが迫られたことである。規律に対する服従という思想にも色々あるが、われわれがここで克服すべきものとしてとりあげている思想とは、一二・一八ブンド服務規律に体現化されており、その政治的性格は、綱領に戦術問題である革命戦争を含めることによって、この「綱領」で結集した人々が、規律の力でもって革命戦争を実現しようとするものであった。この思想が、第二次ブンドの連合主義的、分権主義的な党組織を中央集権的な組織へと改組してゆく上で積極的な意義を持っていたということは、疑いのない事実であり、このことはすでにわれわれが再三確認してきたことである。

だが、党建設の第二段階以降のわれわれにとっては、この思想は克服の対象であった。しかし、会議を軸とした党活動の時代においては、この克服は真の意味でなされることはなかったのである。なぜなら、会議を軸として非合法軍事組織を運営してゆくということ自体のなかに、戦術問題を綱領問題に含めるという政治的傾向から真に自由ではあり得ないということがあったからである。というのは、非合法軍事組織が会議によって運営されておれば、必然的にその成員を防衛するために、非合法軍事組織に関連する諸組織を全て地下におくということにならざるを得ず、こうして、政治的煽動を広範に行うということや、合法活動を利用するといったことや、広範なプロレタリアートと結合するといった諸任務は提起のされようがなく、革命戦争の戦術を浅く狭い枠で解決するという傾向をもたらさざるを得ず、その結果、この革命戦争の戦術を綱領的内実として位置づけることなしには非合法軍事組織を維持してゆくことができない、ということが起きてくるからである。

文書を軸とした党活動への転換は、われわれの政治活動の根本的な飛躍なしにはありえなかった。非合法軍事組織の成員相互の接触を最小限にすることによって、成員が政治活動の広さと深さとを維持しなければならないということが要求されることとなった。革命戦争に対して用意するということも、革命戦争の戦術を綱領にまで高め、規律の力でもって地下の軍事組織を維持するということによっては真に果たされないことが明らかになったのであり、今日の諸階級の相互関係に規定されたプロレタリアートと党の戦術問題としてそれを位置づけ、そうすることによって、階級戦争としての革命戦争に対して用意しなければならないということが鮮明にされてきたのであった。それは、われわれが直面していた具体的な階級の相互関係からしても事実として明らかなことであった。このような党活動の転換は、また、党員が中央の単なる手足として規律に従って行動するという活動スタイルから、各党員が指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化をおし進め、党の綱領・戦術・組織等の諸問題に対して正しい党の決定を形成してゆくために奮闘しなければならないということを意味した。そして、このような組織においては、決定への服従が、党の規律を生みだす源泉となるのである。かくて、規律に対する服従という思想に代わって、決定に対する服従という思想が、中央集権主義の組織思想を基礎にした党組織の規律問題として確立されなければならず、そのことによってこそ、自覚したプロレタリアートの党としての鉄の規律をつくりだすことができるということが明らかになっていったのである。決定に対する服従の思想はプロレタリアートの経済的地位とその役割を党員がしっかりと把握することなしには血肉化されない。従来のわれわれに残っていた規律への服従の思想は、われわれが党活動の基本的内容に政治的煽動を置いてこなかったことと不可分であり、われわれの綱領、戦術、組織の歴史的限界と不可分である。

一〇・一三二斉検挙攻撃の前段階において、われわれは、党中央部でこれらの問題について一定の解決を与えていた。われわれが一〇・一三検挙攻撃を許したことは、われわれの一定の解決が党全体にまでおしひろげられていなかったということもあるが、またこの一定の解決がそれ自体限界を持っていたことを示すものであった。その限界は政治的・思想的・技術的

等々の多岐にわたるものであるが、われわれは、一〇・一三検挙攻撃に対する反撃のなかでそれらの限界を一つ一つ克服してきたし、また残された課題については今後の活動において克服してゆくであろう。ここでは、一面論文でとりあげている労働者階級に対する政治的教育のための全面的政治暴露を組織することに基づいた政治的煽動の任務に対して、われわれが十分理解していなかったということが、われわれの政治的限界をもたらしていたのであり、したがって、全国的政治新聞の意義についても、党活動の基本的内容を政治的煽動におくということが明らかにされたとはいえ、なお、全国的政治新聞の計画を実現してゆくという点からみれば限界があったということを指摘しておくことにとどめたい。

(二) 党の、運動に対する中央集権的な指導と、指導の中央集権化との混同

われわれの党文献でのこの混同について、具体的に点検しておこう。まず、中央集権主義の組織思想について、プロレタリアート独裁との関連において位置づけているものに『赤報』二号トップ論文がある。この論文では『一歩前進二歩後退』からの引用の後、次のように述べている。

「われわれは、このイスクラの根本的な思想のうちで、まず①中央集権主義の思想を断固として継承する。この問題は、マルクス・レーニン主義党とプロレタリア独裁権力における原則であるばかりか、現時点で、われわれが政治警察と闘争し、秘密活動をつくりあげていく場合に絶対的に要求されていることだからである。」（『共産主義』一六号一四頁）

このように、ここでは、中央集権主義の組織思想を、一方では党とプロレタリア独裁権力における原則とし、他方では党建設における組織原則であると述べている。党の、運動に対する中央集権的な指導の問題と、指導の中央集権化とが、混同されている。また、『赤報』二号「神奈川左派との対立点」では、旧神奈川左派の分権主義が、プロレタリアートの政治的独自性を明らかにしておらず政治的には連合独裁論に陥っていることからもたらされているものであることを示した後に、次のように述べている。

「権力問題に対する、以上のような連合主義的態度は、組織問題における中央集権主義の否定＝分権主義的態度に結びつかざるを得ない。なぜなら、組織は政治内容を実現する道具であり、連合独裁という政治内容を実現するのに、中央集権主義は不適当であるからである。

すなわち、『プロレタリアートには、中央集権的な組織が必要なのであるが、それはプロレタリアートの独裁を実現し搾取者の反抗を抑圧するためにも、社会主義経済を組織する事業において膨大な住民大衆、すなわち農民、小ブルジョア、半プロレタリアを指導するためにも必要なので』（『国家と革命』四二頁）あって、このプロレタリア独裁をあいまいにし、『プロレタリアートと小ブルジョアジーとの連合独裁』におち込むなら、プロレタリアートの中央集権的組織＝一党独裁は、不必要なじゃまものになるからである。」（『共産主義』一六号八八頁）

ここでは、レーニンが、プロレタリアートの独裁を実現し搾取者の反抗を抑圧するためにも、また社会主義経済を組織する事業において膨大な住民大衆を指導するためにも「中央集権的な権力組織」が必要であると述べ、プロレタリアートの国家権力が中央集権的に組織されねばならないと述べているところを論拠にして、「組織問題における中央集権主義」の必要性を論証しようとしている。もちろん、プロレタリアートの独裁の国家が中央集権的な権力組織でなければならないということは、同時に、党が中央集権的な組織でなければならないことを示すものである。このことは疑いないが、しかし、プロレタリアートの党が中央集権的な組織でなければならないということと、「組織問題における中央集権主義」つまりレーニンが『一歩前進二歩後退』で述べている中央集権主義の組織思想とは、同じものではない。

（註）なお、この論文の『国家と革命』からの引用文は正しく引用されていない。原典は、『プロレタリアートには（国家権力すなわち）中央集権的な力の組織（暴力組織）が必要である』となっていて、（　）内の部分が、引用される際に欠落している。そうすることによって、引用文では、「中央集権的な権力組織」がプロレタリアートの国家権力ではなく党であるかの如く読みとられる可能性がある。このような引用文の欠落も、混同の産物であろう

さて、党建設の第二段階において発刊された『共産主義』一六号の「発刊にあたって」では、中央集権主義の組織思想について、当時の赤軍派と日共（革命左派）とを批判して、次のように述べている。

「これら二派の諸君は、共産主義革命を目的とする党は、いつの時代においても、プロレタリア独裁の精神で自らの党組織を満たしていなくてはならないこと、プロレタリア階級独裁の精神と中央集権主義とは不可分一体であることが理解できていないのであり、連合赤軍の『共産主義化』の総括を組織問題として行うことは、とりもなおさず、プロレタリア階級独裁に対する政治的態度の問題であるということが理解できていないのである。」（一〇頁）

当時の二派の諸君が、マルクス・レーニン主義の中央集権主義の組織思想の復権へと進もうとせず、組織に対する思想を変えないままで政治的総括をなそうとしていたことに対し、ここでは、組織思想と政治との関連について指摘し、革命に対するプロレタリアートの独裁という政治的態度を維持することから中央集権主義の組織思想が導かれるとしているのであり、この見地から、「プロレタリア階級独裁の精神と中央集権主義とは不可分一体」ということが主張されているのである。ここにおいても、プロレタリアートの独裁と中央集権的な党組織の必要性という問題と、中央集権的な党は、中央集権主義の組織思想を基礎にして建設されねばならないということが、区分されることなく、プロレタリアートの独裁の精神と中央集権主義の組織思想とが、無媒介に結びつけられているのである。

(三) 混同の総括

(イ) 思想的総括

われわれは、党文献に即して、党の、プロレタリアート・被抑圧大衆の運動に対する中央集権的な指導と、指導の中央集権化とをわれわれが混同してきたことをふりかえってみた。次に、この混同のもっていた思想的・政治的・組織的意味が明らかにされ、そうすることによって、この混同を正しく総括し、克服してゆかねばならない。

この混同が持っていた思想的意味は、何であったのだろうか。党の、運動に対する中央集権的な指導という場合の中央集権的ということは、党のプロレタリアート、被抑圧大衆に対する指導について規定したものであることはいうまでもない。このような指導という点での中央集権化の問題を党の各組織が運動に対して行った指導を中央集権化するという中央集権主義の組織思想と混同したことは、党の指導部と被指導部との関係を、党とプロレタリアート・被抑圧大衆に対する指導・被指導の関係と同様のものとして把えていたことを意味する。党は、プロレタリアート・被抑圧大衆に対して、ブルジョアジーを打倒し、ブルジョア国家を粉砕し、プロレタリアートの独裁を樹立し、これをテコに共産主義を組織する闘いに立ち上がらせるべく、中央集権的な指導を行わなければならないのであり、党中央は、あらゆる党機関に対する指導権を保持していなければならない。このような内容を、党の指導部と被指導部との関係にあてはめるならば、そこには中央集権的な組織を建設してゆくための組織思想として中央集権主義の組織思想があることがあいまいになり、もっぱら指導権を党中央に集中するということとして指導の中央集権化ということが理解されてしまうことになるのである。

中央集権的な党の指導部は、プロレタリアート・被抑圧大衆の運動を指導するためには、党のあらゆる機関に対する指導権を有していなければならない。このことが保障されていなければ、その組織は中央集権的な組織ではあり得ない。だが、このことは、中央集権的な組織を建設するための組織思想を意味するものではない。指導部が、党のあらゆる機関に対する指導権を実際に行使し、プロレタリアート・被抑圧大衆の運動を中央集権的に指導することができるためには、中央集権主義の組織思想に従って党建設がなされねばならないのであり、したがって、党内のあらゆる機関に対する指導権が党中央にあるということは、中央集権主義の組織思想に基づいた党建設によって実現してゆくものなのである。

だから、中央集権主義の組織思想を指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化という組織原則として明らかにしたレーニンは、指導権を党中央に集中するというようには問題をたてなかった。党中央は、もちろん党内のあらゆる機関に対して指導権を有している。しかし、レーニンは何よりも党中央は全国的な運動に対して指導権を発揮しなければならないとし、地方的運動に対しては各級機関に指導権を委ねていたのである。では、指導の中央集権化とは具体的にはどういうことか。それは、各級機関が行った運動に対する指導の内容を党中央に報告するということであり、そうすることによって、党中央が全国的な運動の指導を中央集権的に行うことができるようにする、ということなのである。

「いまやわれわれは、党組織および党活動全体のきわめて重要な原則に到達した。すなわち、プロレタリアートの運動と革命闘争との思想的および実践的指導の点では、できるだけ強い中央集権化が必要であるが、党中央部に（したがってまた一般に全党に）運動の事情を熟知させるという点、党にたいして責任を負う点では、できるだけ強い地方分散化が必要である。運動の指導は、経験の試練を経た職業的革命家たちのできるだけ少数の、できるだけ同質的なグループが行わなければならない。運動に参加するのは、プロレタリアート（及び国民のその他の階級）の種々さまざまの層に属する、できるだけ多数の、できるだけ多種多様なグループでなければならない。そして、このようなグループの一つ一つにかんして、党中央部は、その活動についての正確な資料だけでなく、それらの構成についてのできるだけ完全な資料をも、つねに持ちあわせていなければならない。われわれは運動の指導を中央集権化しなければならない。われわれはまた、党員のひとりひとり、活動参加者のひとりひとり、党に所属しているあるいは党に同調しているサークルの一つ一つの、党にたいする責任をできるだけ地方分散化しなければならない（事情を熟知していなければ中央集権化は不可能なのだから、指導の中央集権化のためにもそうしなければならない）。この責任の地方分散化は、革命的な中央集権化の必須条件であり、その欠くことのできない補正手段である。中央集権化が最後まで行われ、われわれに中央機関紙と中央委員会ができたそのときこそ、どんな極小のグループにもそれら（中央機関紙と中央委員会）にむかって意見を述べる可能性があることによって――意見を述べる可能性があるだけでなく、また中央機関紙と中央委員会にむかって意見を述べる規則的習慣が多年の実践を通じてつくりあげられていることによって――、あれこれの地方委員会の構成がたまたま不適当なために悲しむべき結果をまねく恐れはとりのぞかれるであろう。われわれが党を実際に統合し、真の指導的中央部を創設するまぎわまで近づいている現在、われわれはとくにつぎの点をしっかりと銘記しなければならない。それは、もしわれわれが同時に、中央部にたいして責任を負う点でも、党機構の大小いっさいの車輪の状態を中央部に熟知させる点でも、最大限の地方分散化を行わないなら、この中央部は無力なものとなるだろうということである。このような地方分散化は、われわれの運動のもっとも緊要な実践的必要の一つをなすものと一般にみとめられている分業の他の半面にほかならない。」（『レーニン全集』六巻「一同志に与える手紙」二四七～八頁）

ここでレーニンは、運動に対する指導という点での中央集権化の必要性と党の各組織が運動に対して行った指導を中央集権化することとを明示的に区別して論じているわけではない。だが、「中央集権化」のためには「運動の指導を中央集権化しなければならない」とされ、それは具体的には、各級機関及び個人がその活動について規則的に報告するということであるとされている。そして、「指導の中央集権化」によって実現される「革命的な中央集権化」のためには、党に対する責任の地方分散化が必要であることが強調されているのである。というのは、党に対する責任の地方分散化が広範になされればなされるほど、指導の中央集権化もより広範な活動に関してなされることになり、それだけ一層党中央を強化し、党の、運動に対するより一層の中央集権的な指導を可能にするからである。かくて、レーニンの主張は、党中央とその他の党機関等の間の指導・被指導関係は、このような中央集権主義の組織思想によって維持されねばならず、そしてそうすることによって中央集権的な党を建設するというものであったということは明らかである。

以上述べたことから、中央集権主義の組織思想を党の運動に対する中央集権的な指導と混同し、これをプロレタリアートの独裁からの組織問題の解決を指導部の運動に対する指導性と各級機関に対する指導権とによって解決しようとする試みであり、思想的には戦術主義であり、ブルジョアジーとその国家に対する急進的反対派であることがわかる。このことはまた、党組織をプロレタリアートの運動に対する指導性（ヘゲモニー）として把えていたということでもある。党の組織問題を党中央の指導権でもって解決しようとし、その指導権を運動に対する有効な指導性を発揮することによって獲得しようとすることは、大衆闘争の指導部としての党という第二次ブンドの組織思想の枠内にあり、非合法党の組織問題を解決する基準としては役立たない。われわれは党建設の第二段階において、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核とする党建設にとりくみ、第二次ブンドの指導部とは比較にならないほどの中央集権的な指導部を作り上げてきたが、しかしその当時においては、第二次ブンドの組織思想を完全に克服するには至っていなかった。われわれは第二段階における非合法組織の活動の経験を定形化し、総括することによって、非合法党の組織問題を中央集権主義の組織思想を基礎にして解決してゆくことを学びつつあったのであり、かくして一〇・一三検挙攻撃に対してもただちに反撃し、党建設の新たな段階を切りひらく闘いを開始することができたのであった。

(ロ) 政治的総括

次に、この混同が持っていた政治的意味について明らかにしておこう。それは、中央集権主義の組織思想の政治的根拠がプロレタリアートの独裁におかれてしまうということにある。共産主義の党の組織問題をとりあつかう政治的基準は、共産主義的政治でなければならない。にもかかわらず、この混同は、組織問題をとりあつかう政治的基準である共産主義的政治をプロレタリアートの独裁に切りちぢめることになっていたのである。共産主義の党の綱領においては、プロレタリアートの独裁は当面の目的であり、プロレタリアートの経済的解放のテコとして役立てねばならないものであり、戦術思想の原則である。したがって、組織問題をとりあつかうときの政治的基準をプロレタリアートの独裁においたことは、共産主義的政治を戦術問題に一面化することになっていたのである。

ここから、組織問題をめぐる党内闘争を共産主義的政治をめぐる思想闘争として展開するための基準が不鮮明となり、プロレタリアートの独裁を樹立するための有効な手段は何か、といった戦術問題をめぐる思想闘争に解消され、技術的な解決が与えられてゆく傾向が生み出されていたのである。

しかも、スターリンのように党組織に加盟すること、党員であることをもって党の戦術の統一の保証とするわけにはいかないにもかかわらず、戦術問題がたえず綱領的内実として把握される傾向があったわけだから、共産主義的政治をめぐって全面的な思想闘争をとおしてもなって闘われるべき党内闘争はその発展を抑圧され、綱領的内実としての位置を占めていた戦術問題に従っているかどうかをめぐって展開される傾向にあり、こうして、規律問題が、党内闘争及び党の組織問題解決のための焦点として提起されてこざるを得なかったのである。

われわれが、党建設の第二段階における多くの党内での粉争を規律問題に集約する形で解決してきたことは、第二次ブンドの合法組織を非合法軍事組織に改組してゆくための不可欠の径路であったが、その背景には組織問題解決の政治的基準をプロレタリアートの独裁においていたということがあったのであり、プロレタリアートの独裁ということの政治的内容が組織問題を規律問題へと煮つまらざるを得ないようにしていたのである。更に言うならば、党の組織問題をとりあつかう政治的基準を共産主義的政治におかず、プロレタリアートの独裁におくということは、プロレタリアートの独裁に対する理解そのものに一面性をもたらさざるを得なかったということであり、このことが一方における戦術主義、ヘゲモニー論、他方における規律への服従の思想の未克服をもたらしていたのである。

またこのことは、われわれが、歴史的には断固として党の軍の機能を拡大し国際非合法党の基準を作り上げる道を進む過程で、党の規律を党の正規軍の規律から形成しなければならなかったということとも深くかかわっている。軍の政治的基準はプロレタリアートの独裁のための革命戦争にあったわけであり、また、実際の軍事行動における規律は党の規律をそのまま適用することはできないということと共に、一層重要なことは、軍を指導すべき党の方に規律が欠けていたということがあったのである。したがって、軍の自然発生性が持つ規律への服従という思想が党内にもち込まれたのであり、このことは、一定の歴史的時期においては、党にとっては偉大な進歩であったのである。

もっとも、党は規律への服従といった思想の次元にとどまることは許されない。われわれは、すでに第二段階において、正しい資本主義批判に裏づけられた階級闘争に対するマルクス主義の原則を復権していたわけであり、組織問題をとりあげる政治的基準をプロレタリアートの独裁におく傾向を克服する条件を、すでにその内部に保持していた。われわれは、『赤報』四号では、七・六以来のわれわれの党内闘争に関するテーゼである「党内闘争・党派闘争を進めるその方法が同時に党建設である」。（『共産主義一六号一三九頁）という主張に依拠していることを明示し、「思想における折衷主義を克服することなしには、中央集権的組織の建設は空語である。そしてまた、階級闘争に対するマルクス主義の原則に首尾一貫して立脚することによってのみ、組織に対する中央集権主義の思想を具体化することができる」（同書、一四二頁）と述べ、中央集権主義の組織思想の政治的基準を第一インター規約前文で表現されている共産主義の綱領的内容においてきた。

われわれの第二段階の闘いは、中央

集権主義の組織思想にもとづいて、党内の諸問題を解決してゆくための転換点をなしていた。われわれ自身この過渡的な第二段階を終了させ、党活動の転換を勝ちとらねばならないことを意識していたが、以上述べてきた党の運動に対する

(八) 組織的総括

最後に、この混同の組織的意味が明らかにされねばならない。すでにこの混同の思想的・政治的意味を明らかにしてきたことによって、われわれは、この混同が、組織的には規律への服従を要求する思想となってあらわれることを指摘した。この規律への服従という思想は、明らかに、革命戦争を綱領に含め、規律の力で革命戦争を組織しようとした一二・一八ブンドの服務規律の残滓であった。ここではわれわれが第二段階において、その残滓を克服すべく努力してきたのであるが、その努力が思うように成果をあげなかったことはその残滓を克服する具体的手段を発見することに立ち遅れたことであり、そしてこの立ち遅れをもたらした原因として、この混同があったということをまず指摘しておきたい。

指導の中央集権化と中央集権的な指導とを混同し、前者をプロレタリアートの独裁から位置づけたことは、中央集権的な指導を保障してゆく共産主義的政治に基づいた組織思想をぬきに党内での中央集権的な指導を権力組織として遂行するということになり、必然的に規律への服従を指導の手段とすることに陥らざるを得ない。このような傾向を克服する第一歩は、すでにふれたように、中央集権主義の組織思想を階級闘争に対するマルクス主義の原則から位置づけることであった。われわれは第二段階においてこの主張を強く打ち出しており、決定に対する服従という思想の復権もなされてきていた。しかし、これだけでは規律への服従という思想を完全に克服することはできなかった。労働者階級に対する政治的教育のための全面的政治暴露を組織することに基づいた政治的煽動を党組織の活動の基本的内容とし、全国的政治新聞と結合された党内公開制を確立してゆく闘いが開始されてゆくなかで、決定への服従という思想を強化してゆく条件が獲得されてきたのである。われわれは、決定への服従という思想を党員及び党に同調する人々の党規律に対する思想として確立してゆくことによって、プロレタリアートの革命党にふさわしい鉄の規律を必ずや創り出してゆくであろう。

ところで、党の運動に対する中央集権的指導と指導の中央集権化との混同の組織的意味は以上の問題にとどまらない。この混同は、秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化という組織政策を正しく実施することに対して大きな障害となっていたのである。一般的にみても、この混同は組織原則における混乱を意味していたわけだから、この原則によって運用されるべき組織政策を正しく実施することの支障となることは明らかなことである。具体的には、秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化という組織政策は、組織における分業一般の、秘密組織における一つの特殊なありかたであり、その特徴は組織の秘密の機能を党中央の手に集中するということにあるわけだから、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化ということが正しくとりあげられない場合、この秘密組織における特殊な分業を成功させることもおぼつかなくなるわけである。

さらにまた、この党に対する責任の地方分散化ということが「分業の他の反面」であるという事情が、組織原則と組織政策との区別をあいまいにし、分業によって専門化することが秘密の機能の集中や指導の中央集権化をおのずから生み出すかのような考え方を生じさせてくるのであり、われわれが第二段階ですでに明らかにしたこの区別を、無に帰すような傾向がたえず再生産されてくる。

全国的政治新聞と結合した党内公開制の保障による中央集権主義の組織思想の具体化と、労働者階級に対する政治的教育のために全面的な政治的暴露を組織することに基づいた政治的煽動の活動を開始する作業が、この混同の克服と不可分であったことを考慮すれば、政治的煽動の活動によって党を訓練し、決定に対する服従という思想を確立してゆくことによって、秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化も正しくなしとげてゆくことができるということは、今や明らかであろう。

以上で、党の、運動に対する中央集権的指導と、指導の中央集権化との混同に関する検討を終わる。われわれはここではもっぱら両者の区別について論じてきたが、その理由は、われわれがいまだ革命戦争派の中央集権化された単一党建設の途上にあるからであり、そのような時期に、すでに中央集権化された党の組織や機能のことについて述べることは、われわれの今日の緊急な組織上の任務を忘れることになるからである。このことをふまえるならば、中央集権的な党という思想と中央集権主義の組織思想とがお互いに結びついたものであり、中央集権主義の思想の個々の分野を構成しているものであることは明らかである。われわれが革命戦争派の中央集権的な単一党建設を前進させるにつれて、中央集権的な党の組織や機能の問題は重要な問題となってゆくであろう。中央集権主義の組織思想と中央集権的な党とのこの結びつきを考慮に入れないならば、われわれは革命戦争派の分散している現実に拝跪し、それを合理化する無政府主義・連合主義に陥るであろう。

資料・再び「全国的政治新聞の計画」について

ブンド系諸派は、軍事組織を建設するに当り、どの分派もレーニン『何をなすべきか』の限界なるものについてふれてきた。赤軍派神奈川「左派」に至っては、はっきりとレーニン主義ではやっていけないと言明したものである。

そもそも、ブンド系諸派のレーニン組織論に対する批判は、『何をなすべきか』において、レーニンが直接に党を軍事組織として建設することを目的にしていないというとからもたらされたものである。そして、この批判は、政治的には革命戦争を「革命の道筋」として設定する発想と結びついていた。革命戦争を、党が採用する階級闘争の戦術の一つとして設定せず、階級闘争と同義に用いるという考え方がそれである。

われわれは今日、革命戦争派の大きな欠陥として、党派の綱領のなかに革命戦争という戦術問題を含めてきたことがあると考えている。一九六九年の第一次RG建設以来、われわれ自身そうだったわけであり、戦略綱領主義で革命戦争を綱領に含ませない限り、RGの創建と革命戦争を開始することができなかったという意味において、われわれは、この欠陥の歴史的正当性を認める。

しかし、多くの経験を学び、革命的マルクス・レーニン主義の綱領を復権しようとする今日のわれわれにとっては、この欠陥は総括され訂正されなければならず、歴史的正当性のうえにあぐらをかくことは許されない。

ここでは、第二次ブンド以来のすべての文献にあたって、レーニン主義の理解をたしかめる作業は行わない。われわれは、三谷組織論メモにその基本的な内容を見いだしうる。

三谷論文において、もっぱら権力の性格の相違から、レーニンの時代とわれわれの時代との差異を指摘しようとする三谷は、文書の配布が非合法であったという点にレーニンの全国的政治新聞の計画の特徴を見い出そうとしている。

「レーニンが全国的政治新聞を組織建設の環として設定し、全国政治新聞の配布網として蜂起の組織をつくろうとしたのは、明らかに上記の様なロシアの現実的権力関係と組合主義に対する社会民主主義的政治の内容規定を前提としている。大衆を革命にむけて組織し、党の下に結合していくという政党としての自明の確認にとどまらず、全国的な文書配布網の形成としての文書配布活動の政治警察からの防衛を軸とした職業革命家の養成、その職業革命家の『陰謀組織』としての組織化を、党員の活動基準として上から厳密に想定したのは、まさに生きた階級闘争の中で、非合法党を建設しようとしたからである。レーニンの『全面的政治暴露』と言う社会民主主義的政治に対する一見常識的な内容が、何故ロシアの下では非合法党と結合するかは、ロシアが『専制国』であるという特有の権力関係と深く結びついている。」（四頁）

レーニンの全国政治新聞の計画が、ロシアにおける階級闘争の特殊性に規定されたものであったことは、その通りである。だが三谷は、レーニンの計画の特殊性のなかに、普遍的な内容があることに十分注意を払っていない。そればかりか、特殊性を形式的に把握し特殊的計画の構造を固定化して取り出し、例えば、レーニンが全国的政治新聞を環としたのであればわれわれは何を環とすべきかというような問題意識にとりつかれている。

三谷は、レーニンの全国的政治新聞の計画がどの程度ロシアの現実の階級闘争に規定されているのか、また、この計画の普遍的な内容は何であるのかについて、十分考察していない。われわれは、『序章』一三号論文で、レーニンの計画が、プロレタリアート独裁という綱領的内容を射程に入れた組織計画であること、及び、組織に対する中央集権主義の思想をその基礎にしていることの二点を普遍的な内容として指摘してきたが、三谷の場合は、このことが明確にされていない。

例えば、全面的政治暴露の把握にしても、三谷はもっぱら、文書配布が非合法であるということから特別の意義を発見しようとしている。だが、レーニンは、政治的煽動をいかにやるべきかを考察しその性格が全面的政治暴露でなければならないことも主張しているのであって、三谷は、政治的煽動と全面的政治暴露とを混同している。

レーニンが、政治的煽動の性格を全面的政治暴露として規定したことは、単に権力関係からのみでは説明し切れない内容が含まれているのであって、社会主義者鎮圧法下のドイツ社会民主党の非合法機関紙をみるならば、文書の配布が非合法になっているということだけで、全国的政治新聞のレーニン的な意義が生まれ出るものではないことが明らかになるだろう。すなわち、『ゾツィアルデモクラート』は、権力関係において非合法であるという点では『イスクラ』と変わらなかったが、その果たした役割には大きな相違があったのであり、『ゾツィアルデモクラート』発刊をもってドイツ社会民主党の社会主義者鎮圧法実施以降の混乱は克服されつつも、その基本的活動方向は、秘密活動と暴力革命ではなく、選挙闘争の勝利に向けられていたのである。

こうして、三谷のように、レーニンの全国的政治新聞の計画を権力との関係から主要に把握しようとすることは、問題の所在をかえってあいまいにしてしまうことになるであろう。権力との関係において、党のどのような活動が政治警察との闘争で焦点をなすか、ということと、党建設の基本的な環とは、おのずから結びついているわけではないのである。

さて、三谷は、「レーニンは蜂起のための全国的戦闘組織を全国政治新聞の配布網として作りあげた。われわれはそれを恒常的に武装闘争を展開する軍事組織として作りあげねばならない」と述べ、自らのレーニン解釈に従いつつ、次のような党の改組を提起した。

「イスクラ編集部としてレーニンが党の中枢部を作ったとすれば、われわれはYBとしてそれを形成せねばならない。……細胞は日常的な政治活動の単位であると同時に軍事組織の単位である。」

この改組提案は、PB＝YB、RG＝政治軍隊として今日のわれわれによって継承発展させられたものであり、一九六九年以来のRG建設の一定の総括に基づいた現実的なものであった。

「党の基本組織は、政治局・細胞である。細胞は一つの物質力としての軍事単位であり、かつ大衆をそのまわりに統合していると同時に、権力との関係において、プロレタリア内部に深く分散している。そのような細胞を政治局が指導するためには、旧来の中央委員会、各専門機関形式以外に、政治局が又物質力である軍事組織単位でなければならない。そして、政治局が軍事単位であるためには、政治局が最強の戦闘部隊を直属させていなければならない。われわれはそれをRG（正規軍）と規定する。レーニン党は組織建設の環を全国政治新聞に設定した。そして、それは当時のロシアの権力関係を前提して理解されねばならないと述べた。今日では、その機能はRGが果たさねばならない。細胞を通じてたえず流入する大衆の自然発生性は、一方において組織に精気と生血をふきこみ、指導部の旧い体質を点検すると同時に、すさまじい圧力で党を自然発生性の前に解体させる。このようなブルジョアイデオロギーの党内への流入を細胞に対する絶えざる点検と指導を通じながら、未然に防衛する政治局の党建設の具体的媒介手段がRGである。」（八頁）

RGの実践的総括から導かれた正しい改組提案を、形式的なレーニン主義理解にあてはめて、組織的位置付けを行っているこの部分に、三谷のレーニン主義理解の誤りが集中的に出てきている。結局三谷は、党内闘争における具体的な措置と党の型とをきちんと区別していない。

この部分における三谷の根本的な誤りを、以下に明確にしておくことにしよう。

第一に、三谷は、レーニンの全国的政治新聞と同様の組織の環として提起したRGの任務を、自然発生性との闘争としている。レーニンは自然発生性との闘争を社会民主主義者の任務としているわけであり、社会民主主義者がこれをなしとげるためには、労働者大衆に目的意識的な政治教育を与えることが必要であり、この政治教育は全面的政治暴露を組織することでなければならないことを明らかにし、全国的政治新聞は全人民的政治煽動と全面的政治暴露を目的として行わねばならないことを述べている。その限りで、全国的政治新聞は自然発生性との闘争の手段を提供するであろうが、レーニンはあくまでも全人民を対象とした闘争手段として新聞の機能について述べている。ところが、三谷は自然発生性との闘争をもっぱら細胞と政治局との関係で論じているのだから、三谷はレーニンの全国的政治新聞の機能の一面を（つまり党の再組織という面で）とりだし、それとRGの機能が同じものだと主張していることになる。こうして、三谷は、レーニンの全国的政治新聞の計画が、党の再組織の計画であったと同時に、党の型から規定されたものでもあったということに十分注意を払っておらず、特に後者の役割を無視しているのである。

第二に、三谷はこのあとで「RGは軍事を組織する党を、権力との関係で、他党派との関係で、防衛し、かつ攻撃する最強の部隊であり、かつその戦闘体制として分散を原則とする細胞の日常形態を集中化していく任務を持っている」（八頁）と述べている。ここでは、われわれがすでに明らかにしてきた三谷論文における「秘密の機能の集中と運動の機能の専門化」と「指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化」との混同については、あらためて述べないが、三谷はここで、指導の中央集権化を組織に対する思想として述べずに、もっぱらRGの機能として論じていることである。これは先に、自然発生性との闘争を思想問題としてとりあげず、新聞やRGの機能として把握している点と関連があるが、全国的政治新聞は組織に対する中央集権主義の思想を育てていく手段ではあるが、それ自体が、指導を中央集権化する機能を持っているものではない。つまり、組織に対する中央集権主義の思想を基礎にして発行される全国的政治新聞は、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化の手段として機能するであろうが、三谷の理解はこうではなく、全国的政治新聞の機能そのものが中央集権主義を育てるものと把握しているのであり、思想問題を組織の機能の問題として考えているのである。

こうした理解の上に、レーニン型の党では軍隊を組織できないという考えが導かれてくるのであるが、今日、逆に、レーニンの党組織に対する型をもち出して、革命戦争の否定やRGの否定を行おうとする人々は、ブンド系諸派の革命戦争派が軍隊の機能をもって機関紙の機能に代えてきたことに対する裏返しでしかない。

結論的に言えば、レーニンはあらゆる事態に対して用意のある組織として党の型を規定しているが、この「あらゆる事態」のなかには革命戦争も含まれているということが、われわれの考えであり、軍事組織の建設と革命戦争の準備を正しい路線、すなわち、国際非合法党建設の路線の下になしとげるということである。くり返し言おう。われわれは、ブンド系諸派のレーニン組織論に対する誤ったドグマを克服し、党の活動の基本的内容をプロレタリアート・被抑圧大衆に対する政治的煽動におくことによって、党活動の新たな段階を準備しなければならない。

（一九七六年一二月二五日発行『RG救対ニュースNo.2』より再録）

〈以下次号〉

〈三面よりつづく〉

は日和見主義、社会排外主義、社会帝国主義を打倒すべきプロレタリアートの前衛党の建設によってのみ可能となることが明らかにされなければならない。

我々は西独赤軍の闘争を革命的マルクス・レーニン主義の観点から支持する。国際的な日和見主義社会排外主義、社会帝国主義の潮流が、いまだ多くのプロレタリアートをだましとおすことができているのは、共産主義者によるプロレタリアートに対する真剣な政治教育の活動が欠けているためである。自らのブルジョアジーに対する経済的服従が根底にあることによって、あらゆるかたちでの災禍が自分にふりかかっていることを充分に理解できないプロレタリアートはブルジョアジーのまわし者である労働代官共につき従わざるをえない。帝国主義各国の革命戦争派が真に日和見主義、社会排外主義、社会帝国主義を打倒し、プロレタリアートを組織してブルジョアジーとその国家を打倒し、階級の廃止にむかって社会主義的生産を組織するプロレタリアートの独裁を準備しようとするならば、各国の革命戦争派は革命的マルクス・レーニン主義を復権し全面的な政治暴露を組織することによる全人民的な政治的煽動の活動に必ず従事しなければならない。そのような政治的煽動の活動によってこそ、プロレタリアートの経済的地位とその役割を正しく指し示し続けるべき前衛の任務が果され、共産主義的政治の継続としての革命戦争を組織することができるのである。そして、このような全人民的政治的煽動の活動は全国的政治新聞の発行なしにはありえない。全国的政治新聞の計画を「規則的な共同の事業」として実現することによって、革命戦争を含むあらゆる事態に用意のある党組織をつくりあげ、共産主義と労働運動との結合をつくりだしていくことができるのである。このような党の形成は帝国主義各国の革命戦争派の国際非合法党としての自己形成である。

すでに獲得されてきた革命家の国際的な合法―非合法のつながりは、各国の革命戦争派が全国的政治新聞の計画を達成することによって、相互の規則正しい通信と意見の交換を国際的に実現していくことに役立てられなくてはならない。このような事業の実現による国際的なプロレタリアートの結びつきと相互理解の強化こそが、国際的党派闘争における革命的マルクス・レーニン主義の勝利をもたらすのである。われわれ共産主義者同盟（RG）は、党建設の第一段階において獲得した政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊の組織的基準を堅持し、『赤報』を全国的政治新聞としてつくり上げていくことによって、国際非合法党建設をおし進めるであろう。

プロレタリア革命と背教者宮本一派（上）

〈一〉宮本一派の破産のはじまり――一四回大会

日本共産党宮本一派の一四回大会（七七年一〇月）は彼等の破産のはじまりである。「七〇年代に民主連合政府を」のスローガンを一九七〇年一一回大会において掲げてからの七年間、宮本一派はマルクス主義からの背教とひきかえに小ブルジョアジーの支持を獲得することによって、ブルジョア議会における多数を獲得し、民主連合政府を樹立できるという反動的な夢にすがり、ひたすら集票活動にあけくれ、革命的プロレタリアートの闘いに敵対し、ブルジョアジーへの屈服を深化させてきたのであった。革新統一戦線と名づけられた選挙同盟の追求と「国民的合意」の名によるブルジョアジーとの域内平和の追求が七〇年代を通じての彼等のスローガンであった。従来の自民党の主要な支持基盤の一つであった農民・中小企業者のプロレタリア化が進み、ブルジョア議会における自民党の多数支配の崩壊傾向がはっきりしてきたここ数年の情勢の中で、宮本一派の夢はかなえられるかのように見えた。しかし、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争はブルジョア議会の外でこそ闘われてきたのである。ここ数年の資本と賃労働の対立の深化はブルジョアジーによるプロレタリアートへの攻撃を激しいものにした。一九七六年ロッキード事件の暴露と結びついた自民党の内部抗争が形成される中で、ブルジョアジーが行なったのは、一方では我々共産主義者同盟（RG）への攻撃を頂点とする一連の革命戦争派への組織破壊攻撃であった。そして他方においてブルジョアジーはその反共キャンペーンによって宮本一派への総攻撃を行った。戦前のスパイ査問事件をとりあげた「リンチ殺人」のデマゴギーは自民―民社―公明の結託、反共マスコミの総動員によってふりまかれた。宮本一派がたとえどのように「自由と民主主義」を唱え、ブルジョアジーの反共キャンペーンに対して身の潔白を叫んだにしても、彼等が口先で社会主義を語り、マルクス主義を語ることによって、多くのプロレタリアートをだまし続けようとするかぎり、ブルジョアジーは更に深く宮本一派を屈服させ、ブルジョアジーに順応させることに意義を見出したのであり、宮本一派を対象としたキャンペーンによって革命的マルクス主義をも誹謗し、共産主義運動とプロレタリアートとの結びつきをいかなる意味においても断ち切り、プロレタリアートをブルジョアジーに思想的に従属させようとしたのである。このブルジョアジーの攻撃に対して宮本一派が行なったのは戦前の事件はリンチ殺人ではなくショック死であるといういいわけと七六年七月一三回臨時大会における「プロレタリア執権」の綱領からの削除、「労働者階級の権力」への言いかえ、「マルクス・レーニン主義」の綱領・規約からの削除、「科学的社会主義」への言いかえ及び「自由と民主主義の宣言」の採択であった。すなわち宮本一派はプロレタリア独裁の否定とブルジョア議会主義への屈服を完全なものにし、革命的マルクス・レーニン主義からの背教を完全なものにし、自由主義と共産主義の一致を叫ぶことによって、ブルジョアジーに対するより忠実な召使いとして行動することを宣言し、そのことによってブルジョア議会における自らの生命を維持しようとしたのであった。

「臨時党大会に提起される三つの議案は、それぞれ重要な政治的理論的根拠をもつものでありますが、これらの議案をわが党中央が提出した最大の動機は、今日の複雑な政治情勢について明確な展望をあきらかにすることであります。そして、わが党の理念にたいするかれらの中傷・ひぼうにたいして受動的に対処するのではなく、わが党こそ、歴史的にも理論的にも、まさに自由と民主主義の確固とした戦士であることを明確にすることであります。また、わが党の近来の偉大な躍進の旗じるしである党綱領の基本路線を堅持しつつ、わが国の幾百千万の人びととわが党がいっそう深くむすびつきができるように、綱領・規約の一部改定をふくめて、より的確なものにすることであります。」（宮本顕治のあいさつ。日本共産党第一三回臨時大会決定集九頁）

しかし、この宮本一派の試みは完全に破産した。七六年一二月衆院選、七七年七月参院選における彼等の後退はその証明である。宮本一派がふりまく「自由と民主主義」の幻想に期待して、彼等に投票してきた小ブルジョアジーの一部は、ブルジョアジーの反共キャンペーンに直面して恐怖し、政治警察の手によって宮本一派のブルジョア的退廃や泥酔の数々が暴露されるや、その「不潔さ」に失望して、新自由クラブ、公明党、民社党に投票したのである。また、宮本一派は大都市におけるプロレタリアートの票をも思うように獲得できず、労働者階級が今日宮本一派を見放しつつあることが示された。こうして一四回大会において、宮本一派は選挙における敗北を追認し、民主連合政府の展望が遠のいたことを承認せざるをえなかった。

「七〇年代をあと一年残すだけという今日の時点でなお革新統一戦線が未結成のままであり、自民党・財界の反攻の前に革新勢力が国政選挙での後退を経験してきた現状のもとでは、民主連合政府樹立をめざすこの闘争を、より長期的な視野で展望することが必要となってきている。」（日本共産党第一四回大会決議『前衛』七七年一二月臨時増刊三五―三六頁）

だが一四回大会において宮本一派は選挙における後退が自らの路線的破産であることを認めようとはしなかった。彼等は路線が破産したのではない、歴史とはジグザグの道を進むものだと居直った。一四回大会の前段に彼等は『赤旗』拡大月間と党員拡大運動を展開し、『赤旗』読者三三〇万（日曜版読者を含む）の合計を「史上最高の党勢」として誇り、所属機関の決議によって代議員を拘束したところの、その大会の運営の仕方によって下部党員の不満を封殺し、満場一致の大会を実現した。そしてブルジョアジーにつけいるスキを与えたとして戦前のスパイ査問事件に関して『赤旗』紙上に自己批判を強制された袴田里見の更迭をはじめとして、旧所感派を中心とした多くの古参幹部を更迭あるいは名誉役員として指導部から排除し、宮本―不破―上田を中心とした七〇年一一回大会以来の民主連合政府路線を実行してきた指導体制を固め直した。「日常不断につぎの選挙のために活動するという『通年』選挙運動」が唱えられ、経営支部に所属する党員の居住地での日常活動を可能にするために規約改正が行われた。宮本一派はブルジョア議会政党としての更なる純化によって破産を隠蔽しようとしているのである。

こうして、宮本一派の行っている「主体的総括」の内容は「民主集中制の精神と規律」の全党的な徹底化、「科学的社会主義」の学習による「革命的気概」の養成＝教育立党論、党員の社会的・階級的道義の確立、党員と機関紙の拡大といったものでしかない。宮本一派は「どんな誘惑や圧迫にもまけない党派性」と「不断の自己修養」を党の議員に要求し、また「党員の一部」の退廃や泥酔をいましめ、「民主集中制の徹底の問題を重視しなければならない」と叫んでいる。しかし、宮本一派自身が認めざるをえないでいるように、「とくに七〇年代に入党した同志たちのあいだには最近の活動だけで、第七回党大会以来の党発展の教訓を知らない同志が多い。またこうした歴史的教訓を無視して、党建設を自然成長にまかせ、党の停滞や後退に甘んじようとする日和見主義の議論もある」（一四回大会決議同六四頁）といった事態の中にこそ、一一回大会以来の宮本一派の路線が今日破産していることが明瞭に示されている。七〇年代を通じて宮本一派はブルジョアジーの反共攻撃の口実を与えないといった詭弁の下に、次々とマルクス主義を恥ずかしめ、裏切り、革命的プロレタリアートに敵対し続けてきた。ブルジョアジーの反共攻撃に対して、宮本一派は共産主義を自由主義におとしめ、ブルジョア民主主義に屈服し、ブルジョアジーは革命的左翼を「泳がせ」ることによって民主主義を破壊しようとしていると非難することによって「対抗」してきた。更に彼等は「民族と国民の党」なるブルジョア民族主義者として行動し、ここ数年の日本資本主義の過剰生産恐慌に対しては「国民の購買力」をたかめることによって景気の回復をはかるといったケインズ主義＝近代経済学との融合以外の何物でもないような主張を行って、帝国主義の平和的・民主的発展を求める小ブル的願望を表明してきたのである。このようなブルジョアジーとの「闘争」の仕方によって宮本一派は、ブルジョアジーに屈服しているのであり、ブルジョアジーとの「闘争」を操作しているのはブルジョアジーに他ならない。ブルジョアマスコミの狙いは、宮本一派のスキャンダルとして袴田問題を暴きたてることによって、共産主義に対する大衆の反感を育てようとするところにある。宮本一派が袴田除名に際しブルジョアマスコミにスキャンダルの種を提供せざるをえなかったのは、宮本と袴田との間の党内闘争が共産主義的政治をめぐってなされず、ブルジョアジーに屈服した社会帝国主義の政治をめぐってのみなされたからである。彼等の間の政治的対立は『赤旗』拡大を軸とするか、大衆組織に影響力を持つようなかたちで党活動を展開するかというものであり、後者の見解を主張した袴田は社会民主主義に屈服した見地からそれを主張することによって敗北し、ブルジョアジーに身売りするに至った。しかし大衆組織に対する宮本一派の影響力の後退が、彼等の社会帝国主義の路線の必然的結果である以上、宮本一派は袴田問題（あるいは広谷問題）を利用したブルジョアジーの攻撃に対抗できず、ブルジョアジーへの屈従をますます深化させざるをえないのである。

宮本一派は『赤旗』拡大を軸とした選挙党へと一層純化してゆくだろう。自覚した労働者は宮本一派の社会帝国主義への転落をプロレタリアート、被抑圧大衆に説き明かし、共産主義的政治教育を行うことによって、ブルジョアマスコミの反共主義の宣伝に対抗し、ブルジョアジーの意図を粉砕しなければならない。

〈以下次号〉

〈注〉袴田問題について

袴田里見が宮本一派から除名され、袴田と宮本一派の「闘争」がブルジョアマスコミにとりあげられている。袴田問題は宮本一派のブルジョア的腐敗を端的に示すものである。袴田はブルジョアジーに身を売ることによって、宮本一派と「闘争」している。宮本一派は袴田を転向者として非難しているが、宮本一派自身が社会帝国主義者としてブルジョアジーに屈従しているのであり、袴田と宮本一派の「闘争」を操作しているのはブルジョアジーに他ならない。ブルジョアマスコミの狙いは、宮本一派のスキャンダルとして袴田問題を暴きたてることによって、共産主義に対する大衆の反感を育てようとするところにある。宮本一派が袴田除名に際しブルジョアマスコミにスキャンダルの種を提供せざるをえなかったのは、宮本と袴田との間の党内闘争が共産主義的政治をめぐってなされず、ブルジョアジーに屈服した社会帝国主義の政治をめぐってのみなされたからである。彼等の間の政治的対立は『赤旗』拡大を軸とするか、大衆組織に影響力を持つようなかたちで党活動を展開するかというものであり、後者の見解を主張した袴田は社会民主主義に屈服した見地からそれを主張することによって敗北し、ブルジョアジーに身売りするに至った。しかし大衆組織に対する宮本一派の影響力の後退が、彼等の社会帝国主義の路線の必然的結果である以上、宮本一派は袴田問題（あるいは広谷問題）を利用したブルジョアジーの攻撃に対抗できず、ブルジョアジーへの屈従をますます深化させざるをえないのである。

宮本一派は『赤旗』拡大を軸とした選挙党へと一層純化してゆくだろう。自覚した労働者は宮本一派の社会帝国主義への転落をプロレタリアート、被抑圧大衆に説き明かし、共産主義的政治教育を行うことによって、ブルジョアマスコミの反共主義の宣伝に対抗し、ブルジョアジーの意図を粉砕しなければならない。

〈以下次号〉

『赤報』定期購読の要請

『赤報』編集委員会

一九六九年以来の武装闘争と軍事組織建設の教訓から導き出された政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核とした党建設をわれわれは党中央の建設として遂行してきた。この党中央建設の闘いにおいて、われわれは会議を軸にした組織活動が政治警察と闘争し非合法活動を防衛してゆく上で欠陥があることを明らかにし、文書を軸にした党活動への転換を準備しつつあった。

その結論は、一言で言えば、政治的煽動を党組織の活動の基本的内容とするというレーニンの党の型についての思想を復権することであった。われわれはこの結論の下に全党の飛躍をかちとるための準備にとりかかっていた時点で、一昨年十月十三日にはじまる政治警察の一斉検挙攻撃を受けたのであった。だがわれわれはこの攻撃に対する闘争のなかでわれわれの結論の正しさを実証した。政治警察の攻撃も党員に対する長期の勾留や実刑もわれわれの党建設の前進をはばむことは出来ない。

われわれは『赤報』を全国的政治新聞へと鍛え上げてゆくことによって、われわれの党建設の前進をそれに刻印してゆくであろう。季刊のペースから再出発し、月刊から半月刊、さらに週刊へと発展させてゆくであろう。われわれは読者に『赤報』の定期購読を要請する。定期購読者の拡大は『赤報』の経済的基盤を打ちかため、われわれの党建設の土台を強固にするであろう。

（一）十号分二千円（送料共）

（二）申し込み先

横浜市西区高島町

横浜中央郵便局私書箱一七号

木せい社　あて

〈必　読　文　献〉

『国際共産主義運動の歴史的教訓(一)』……『序章』13号
榎原　均

『国際共産主義運動の歴史的教訓(二)』……『序章』14号
榎原　均

『国際共産主義運動の歴史的教訓(三)』……『序章』15号
榎原　均

入手できない方は，木せい社あてに注文して下さい。